049
Ta.59
2
049-Ta59-2ウ
1200500724506

始

049
TA59
2

樞密顧問官 竹越與三郎著

# 文小品

立命館出版部刊

昭和十五年六月
帝國圖書館藏

903
129

# 三叉小品に題す

此小冊子は立命館出版部の勸誘により、近年の小品文を集錄したのである。昔し或る支那の政治家は、取るには足らぬが、捨るには惜しきものを名けて雞肋と云つたが、此書中の小品文はそれである。併しながら病を癒すには、必しも天下の奇藥のみに限らず、牛溲馬勃でも用ふべきは用いて、以て病を癒すの

が名醫である。

讀者の中、此書中より或るものを採用せらるゝ人あらば至幸である。

五月二十日

竹越與三郎



# 三又小品目次

# 目次


深草の元政どの……一
白拍子たけ女の道の記に就て……二七
西安に於ける日本人の遺跡……四七
二千六百年間に作られた日本人の心性……六五
隨讀隨筆……八一
聖德太子のみでない……八三
萬里小路藤房の足跡……八六
品川臺場の費用……九一
英雄と金錢(問答錄)……九四
桔梗屋覺帳……一〇
倭寇が作つた上海……一四
鷓鴣の聲……一三
福澤先生の誕生日に際して……二五
先生の日本史に於ける地位……二五

理解せられ難い思想家……一二七
西郷隆盛の人間味……一二九
先生の國權論に反駁す……一三一
先生の朝鮮政略……一三三
金玉均の横死と朴泳孝……一三五
初め破壞して後に建設……一三七
元老・西園寺陶庵公を語る……一三九
日本の自畫像……一六七
日本に就ての誤解……一六九
日本史は世界史の一部分……一七五
外國を正解する日本人……一八〇
日本と歐洲の類似……一八七
日本に於ける自由貿易主義の發生……一九四
日本と歐洲と喰ひ違ひの原因……二〇〇
日本自家の文明……二〇七
西洋人が日本人を輕侮しかけた機會……二一三
日本を輕侮したる懲罰……二一七
新日本は模倣に非ず發達也……二二二
北京に於ける各國の眞價……二二八
世界の爲に立ち上つた日本……二三二
世界戰爭の時の日本……二三五
日本は新同盟國を求む……二四二

—終—

# 三又小品

深草の元政どの

# 深草の元政どの

才人は世を經し、能人は世を取り、學人は世に垂れ、曉人は世に會ひ、高人は世を捨つ。達人に至りては、卽ち世を翫ぶと云ふ說のやうに、人の資性と、其の世に處する心構に種々の區別がある。然るに世を捨つる高人の中にも、また三種の區別がある。

西行法師の如きはその第一種である。彼の時に方りては平氏・源氏の二豪族が莊園の中から起つて、政權を取らんとして居る。比叡や奈良の山門は、寺院の荒法師や、破落戶の暴力を恃んで朝命に抗爭する。朝廷の貴族は、かゝる

形勢の中に於て、官位の上下や、權力の大小や、美人の取り遺りに日を暮して居る。西行は大變亂の起らんとするを察し、時の非なるを悲しみ、流轉の世相に心を傷めて、世を捨て、一所不住、雲水の旅に上つたのもである。

第二種の文覺上人の如きは、源平抗爭時代の荒武者で、力と意志とを以て世の中を推し渡らんとする自然兒であつたが、彼が渡邊渡の妻、袈裟御前に懸想して、過つて袈裟を殺したことから、猛然として髮を削つて、佛門に入つたのは茲に說明せんには、餘りに廣く世に知られたことである。第三種の人は、肥前島原の禪林寺の桃水和尙のやうな人である。彼は世を捨てゝ寺に入り、寺を捨てゝ道路を徘徊し、遂には身を捨てゝ、乞食の群に入つた。彼が近江の大津の巷に立ちて、草履を賣るとき、或る人その窮乏を憐みて、阿彌陀如來の畫像を與へたが、彼は之を路傍の壁に貼り、その上に消炭を以て贊を書いた。「せまけれど、やどをかすぞよ、阿彌陀どの、後世たのむと、おぼしめすなよ」此の和尙の如きは、廓然として大悟し、人生を踏破し、直ちに關門を拔けて、門背に突入したやうな所がある。深草の元政上人は、以上三種の世捨人の中、何れに屬するものであるか。

余は十六、七歲の頃、何人かの書いた短文で、元政のことを知つたのが初めであるが、何時の頃よりか、その歌集や詩集を讀むやうになつて、其の人物を好むやうになつた。近年に至りて、續近世畸人傳を讀んで、其の傳記を知ることを得たが、續近世畸人傳にある傳記も、元政の詩集草山集にある傳記も、如何にも物足らぬ所がある。續畸人傳は、櫻を畫く名人花顚居士、三熊思孝が寬政五年に著はしたもので、元政傳としては割合に完備したものである。その說によれば、元政は元和九年（西曆千六百二十三年）京都に生れたものであり、本性は菅原氏であるが、母の姓を襲うて石井氏と稱し、俊平を名とすとある。然るに一話一言には石井半之丞と記すが、何れが是非か知るべからず。そして母が高僧

來訪のことを夢みて、孕みたりなどと、古來の偉人傑士の傳記にありがちのことを記し、元政は十三歳の時彦根城主井伊直孝に仕へたが、或る時江戸に赴かんとするに際し、母氏の珍襲する觀音の小像を携へんことを母に請ふに會うて、母氏は一驚を喫したりと云ふ。それは母氏が昨夜觀音像が俊と共に行かんと夢に告げたばかりなのに、翌朝俊平より觀音像を請はれたるがためなりと云ふ。如何にも眉唾ものの記事であるが、唯此の事によつて、その家庭が、佛道に因緣ありし一事を知ることが出來るのである。

元政の傳記は、猶ほ進んで元政が十三歳より、十八歳まで、江戸の井伊侯の邸内にあり、病を得て國に歸り、母氏と共に和泉の和氣に遊び、日蓮上人の像を拜して三願を起す。一には出家得道せん。二には父母の命、長くして孝養を盡し得ん。三には天台宗の三大部を讀まんこと是なりと云ふ。遂に二十六歳の時、妙顯寺の日豐上人に從ひ、志を遂げて入道し、元政上人となり、深草に瑞光寺を建てゝ、茲に居住し、常に袈裟を脫せず。戒律を持すること嚴重、讀經を怠ることなく、附近の民、その德に化すること、草の風に臥するが如し、と云ふのである。蜀山人の一話一言によれば、瑞光寺は深草の極樂寺村にあり、明暦元年元政上人創草し給ふ。當寺境内の字を藥師堂畑と云ふ、古への極樂寺の藥師堂の跡なりと云ふ。明暦元年に方りて、元政は三十二歳なれば、元政入道の後、六年にして建てしものなるが如し。

以上の傳記では、別に元政が世を捨てゝ入道する動機と云ふものもなく、佛教信者の家に生れ、自然に、何氣なしに、出家入道したものゝ如くである。それでは平々凡々、尋常の僧侶が寺院に倚りて、衣食するのと何の變もないやうに見ゆる。

然るに元政上人が寛文八年（西暦千六百六十八年）四十六歳にして死去してから一百年位の後に至りて、誰が云ふともなく、江戸の吉原で高尾と云ふ名妓に狎

れ染めて破落戸に襲はれ、已むを得ずして、起ち上り、數人を斬殺したる石井常右衛門と云ふ武士が、元政上人の前身であると云ふ說が出て來た。そしてそれが演劇に仕組まれて、明治の中頃まで、江戸の小劇場で演ぜられたのである茲に至りて元政上人の傳記は、血あり涙のあるものとなりかけて來た。

然らば元政上人は實に石井常右衛門であるか。

之に就ては衆說紛々として居る。

余は「石井常右衛門劇」に於て知りたいと思うて、早稻田大學の河竹繁俊君に敎を乞ふ所があり、先づ歌舞伎座報四百七十六號にある初江葉花街達引を一覽した。之は明治十七年本鄕の春木座で演ぜられたものであるが、其の役割筋書は左の通りである。

初紅葉花街達引

○明治十七年十月春木座上演

○主演・石井常右衛門「權十郎」、逸藤佐中太「荒次郎」、三浦屋高尾「田之助」、石井若徒市助「鶴藏」

略筋　武骨一遍の石井常右衛門が殿の御覺めでたきを憎み、何とかして彼を恥かしめて呉れようと意地惡い逸藤佐中太等は石井を吉原へ連れ出して弄りものにせんとの魂膽。石井の若徒市助は主人の一大事と心配し當時全盛の三浦屋高尾の許に宜しくとりなしを懇願した。その忠義に感じて萬事承知した高尾は馴染みの印に香箱を渡した。いよ〳〵その場に臨んで佐中太等は滿座の中で石井に馴染の太夫があるかと恥をかゝせんとしたが高尾が現れて石井を特別な深間扱ひにすつかり計略外れて却つて大恥をかゝされる。之を遺恨に一味は吉原土手で石井の歸りを待ちうけて斬つてかゝつたが佐中太は却つて石井のために斬られる。

日本人名字典の如きは確然、此の說の如く、元政上人を石井常右衛門として採錄して居る。

深草の元政どの

此の外に坪内博士の鑑選せる近世實錄全書に、石井常右衞門(西國巡禮女仇討)なる一篇があるが、それには石井常右衞門を近江彦根の藩士として、以上の高尾事件のやうなことから書き起して、波瀾重疊の小說を作り上げてある。選集者は之に就て、實說として之に對照すべき事は一もないが、部分的にはモデルがある。例へば深草の元政上人と、高尾の關係の傳說的情話と、高尾と島田重三郎の情話から脫胎したものらしいと附記して居る。

江戸の作者にして、歷世女裝考を著はしたる岩瀨京山は、全然元政上人と高尾の關係を否定して居る。彼の說によれば石井常右衞門は、吉原の名妓高尾と相許したが、高尾は仙臺侯の熱愛を拒絕したるがため、隅田川の三叉で、船中に於て、侯のためにつるし斬にせられた。石井は之を聞いて出家したりと云ふのであるが、元政が二十六歲で出家したときは、二代目高尾は、未だ八歲の少女であつた筈である。恐らくは未だ吉原に入らず、その父たる下野の壇原の庄、中壇の農夫長助の家にくすぶつて居たであらう。元政上人と高尾と交涉がなかつたことは、此の一事でも分明であると云ふのである。京山の說は確然として疑ふ餘地がない。

之に次で花柳文學に通じたる者は、吉原の高尾は名妓であるとして、其の作つたと云ふ歌やその人に書き送りし文などと稱するものは、皆な後人の僞作であると云ふ人もある。妓樓は慶長の初期には、江戸の各地に散在したるものを、後、之を一所に集結せしめて、吉原と稱したものであるが、初代高尾、二代高尾などは、吉原發起以來四・五十年後のものであつて、唯だ肉を賣る豐滿の土妓に過ぎず。慶長・元和頃は吉原は未だ寄集めの村落に過ぎず、渾然として一個のソサイテーを爲して居らぬ。從つてその社會的意識なるものを發生する暇がなく、後世で云ふ妓女の意氣地とか、張りとか、氣風とか云ふものは、猶ほ未だ廣く此の社會の信仰やコードとなつて居らぬ。後人の云ふやうな歌、俳

諸・茶の湯・生花・書道の嗜などを獲得するほどの環境ではなかつた。然るに元祿時代に至つて久しき泰平の間に、武士が安逸の生活を營み、町人の富が發達したために、茲に一種のフエミニズムが發達し、婦人崇拜の風が起り、文士など吉原の婦人を賞揚するに、極端の文字を用ゆること十三・四紀のイタリーやフランスの文士が、朝廷の貴妃や、貴族の婦人を崇禮すると同一の趣があつた。此の間に有意無意に初世の名妓に就て多くの僞作が起つたのである。二代目高尾など仙臺侯の求愛を拒絶するどころか、喜んでその購ひ得らるゝ所となつて、私かに仙臺に送られたのである。かゝる土妓が、大侯の求愛を却けて船中に斬殺せらるゝ氣魄を持つたかのやうに云ふのは、作者の心中の希望から發生せられたる幻であると云ふ。從つて此の高尾の相手の石井常右衞門なるものゝ存在する筈がないと云ふのである。

右の如くして、吉原の名妓として傳へらるゝ二代目高尾と、元政上人の關係は、跡方もなく抹殺せられてしまつたが、茲に別に高雄と云ふ名妓がある。これは吉原でなくして、京の島原の名妓である。そしてそれは嫖客に斬殺せられたものでなく、自殺したのである。此の記事の出所は睡餘小錄である。此の書の著者藤原吉迪は然るべき門地の者が、市井に隱退したるもので、好古の癖があつて書道に通じ、書の鑑定に長じて居るが、彼が集めし京都の名士、名妓の書跡の中に、元政の短冊があるが左の歌を書いてある。

寄關戀

遊るさめや猶ほこりすまにかようとも
せき吹こゆる風ならぬ身は　元政

此の短冊の傍に、著者は註釋を加へて、高雄と云ふ妓あり、元政と相許したが思はぬ客に、强ひて身受せられたるをなげきて、自刄したり。元政の出家は、此の事に基づくとは、石井氏の說なりと記るす。且つ元政は其の友人重仲なるものと斷袖の深交があり、元政が在俗時代に重仲に寄せたる文と、此の短冊と

同一文字なるを見れば、是が石井元政が、まだ出家得道せざる以前のものである。と云ふのである。

右の睡餘小錄の記事を見れば、始めて石井元政が出家得道したる動機が分る。江戸の劇作家は、石井元政が高雄と相思相愛の仲であつたことを聞知したが、それが京の島原では、江戸の觀劇家にアッピールせぬので、吉原に作り直したるものならん。已に吉原とすれば、高雄では面白くないので、高尾としたるならん。已に高尾としたる以上は石井某を白井權八の兄弟か、從兄弟位の擊劍家にせずんば面白くないので、數人を撫で斬りせしめたるものならん。

凡そ大故に遭遇するものは、その數少くはないが、多くは無意義にその境遇に狎れてしまふ。然るに元政はその情人の自刄によつて、非常の衝動を受けた。高雄の自殺したのは、元政の十九歳から二十三歳までの間であつたらしく、彼の青春の眞最中で、純眞無垢、多感多情の時期であつたから、悲哀・憂愁、心の底から滾々として湧き來り、抑ふべからざるものがあつたであらう。此の悲哀・憂愁は、人生に對する大疑を引き起したであらう、大迷を生じたであらう。大恨を來たしたであらう。

佛教信者の家庭で生長したる彼は、富士山の頂上から下界へ飛び下りるが如く、人生を棄却することによつて、心中の煩憂・悲哀を醫さんとしたのであらう。此の一點は文覺上人が生命をかけて、戀を仕掛たる渡邊渡の妻を、過つて殺したるがために、武士の群を脫して、桑門の人となつたと異曲同趣である。是ぞ所謂『英雄、首を回せば卽ち神仙』と云ふべきものである。然るに白井權八の御親類のやうな人間に脚色せられたるのは、如何にも皮肉である。併しながら已に世を棄てたる彼は、此の世にない苦である。盜賊と云はるゝも、姦子と云はるゝも、彼に取つては何等の差支もない苦である。

右の如くして石井元政は、心の傷手から、人生を達觀した。されば彼は弘法

や最澄のやうに、堂々佛道を弘通するの猛氣がなかつた。一休和尚の如く、人生を嘲弄するのスレツからし氣分がなかつた。彼は結局、詩人的佛僧であつた。そしてその母に對して孝子であつた。彼の後進が彼の詩を集めたる草山集と云ふものがあるが、その序文によれば、彼の母は京都の人で、彼を京都に生んだと記るしてある。恐らくは彼の父が京都に於て得たる麗人であつたであらう。彼はその父の死後、之を哀みて祭文を作つたが、彼の心は、一層深く母に傾けられたものらしく、詩にも歌にも母を思ふの心が溢れて居る。

畸人傳には彼の辭世として「鷲の山常にすむてふ峰の月かりにあらわれかりにかくれて」との句を掲げてあるが、彼の部屋に書いてあつた「深草の元政どのは死なれけり我身ながらもあわれなりけり」と云ふのが眞の辭世であつたらしい。併しながら所謂辭世なるものは、演說の最後の一句と云ふやうなもので、流俗の人にこそあり得るが、元政の如く、已に世を棄てゝ、朝々暮々の生活が、最後の一句であるものに取つては、殊さらに辭世の句なるものはあるはずがない。彼の死後其の壁に記された左の一章こそ、彼の心の姿を語るものである。

不幸にして世をそむける墨の衣にはあらで、髮ゆふがむづかしさに、頭を剃、柴の軒、竹の柱、身に輕ふ。此に留をく心から世の人を見るに、只身をおもふ業のみに足を空にし、吉野山の花の憐も知らず、深草の鶉の聲をきゝては、燒てくてやりたひと計りおもひ、後は何になることぞや。斯靜ならぬ身は、只人間のみにあらず、山を出る雲は雨を催さん爲に悶しく、山の鹿は妻乞世話に聲のかぎり鳴。これを思ふに此の身ほど樂にひまなるはなし。惠心の作の佛一體持たれど、後世願ふ爲にはあらず持傳へたる道具なれば、御宿申計り也。膝を入るゝの二枚敷、土鍋ひとつに埒明き、正月とも思はず、雜煮くはぬ我には開かれまいとも云はぬ、鶯の初音心よく聞、夜着蒲團ももたぬ家

には見られまいともいはぬ、依怙贔屓のなき窓の月をながめ、嵐吹夜のさよしぐれ、降ふが降るまひが、我身ひとりの苦にもならず。春の色のこぼれ種の夕顔、曲ろふが筋かほふが、あんな物じやと思ひ、睡る筈の目なれば、寢たければ晝もかきこもり、歩行筈の足なれば、手の奴、足の乘物、心の欲する所にあるけども、盜せぬ身なれば、人も咎めず、極樂へ往てたのしみたいとおもふ欲心なければ、地獄へ墮る恐れもなし。死るまで生ふとおもへば、年のよるをもへちまとも思はず。年をかぞへた事なければ、いくつになるやら知らず覺へた事なければ忘れた事もなし。

あら樂や人が人ともおもはねば人を人ともおもはざりけり

松たゝずしめかざりせず餅つかずかゝる家にも春は來にけり

畸人傳や草山集の序文には元政は故あり、母方の石井氏を名乘ると書いてあるが、實は彦根藩士で、二千石を受領する石井道種の第二子で、其の兄は石井半平と稱した。元政は元和九年京都に生れたのであるが、萬治二年、元政が其の父の小祥忌に、父のために作りし祭文に「翁去つて日ならずして外孫侯に封ぜらる」と云ふ文字のあるのを見れば、元政の姉か、妹が、彦根侯の夫人か、側女であつて、その子が父の封を襲うて藩主となつたものであらう。從つて石井の家は彦根藩では有力者であつたらしい。彼は八、九歳の時から江戸に出て、十九歳にして彦根に歸つて來たが、彼が江戸から歸つて來た時と、二十六歳にして妙顯寺の日豐上人に從つて入道した時の間に、島原の高雄自刄事件があつたものらしい。

彼は一個の俗人であつた時にも、讀書が好きで、日本紀と源氏物語には精通したらしい。入道して枯枝の如き存在を保つやうになつても源氏物語は時々讀したことが日記に書いてある。

彼は江戸の彦根藩邸に在るとき已に相當な詩を作つて居り、それは吉原文

學の洞房語園などに載つて居るが、入道した後は益〻詩文に親しんだ。彼は袁仲郎の詩が好きであつたが、伊勢の儒醫南川維遷の閑散餘錄によれば、彼は袁牧詩集を二十遍讀誦して後、詩集を燒き捨てゝしまつたとのことである。是はその格調が好きで讀むのであるから、その格調を呑み込めば足れりである。若し一人の詩集を永く左右に置くときは、却つて其に捕はるゝの恐れがあると云ふのが彼の考へであらう。されば草山集以下の彼の詩集を見ても袁仲郎の手法を學びたる痕跡は、寸毫も現はれて居らぬ。

彼が親孝行であつたことは、已に記るしたが、彼は佛門に入りたる以上在俗の日の如く、日夕朝暮、兩親に侍することの出來ぬのが苦痛であつたらしく、親を懷ふの詩や歌が少くない。今其の詩歌の二・三を左に掲ぐ。

旅懷

抱病飄蓬天一崖　此身未老鬢毛衰　今宵親亦應無夢　燈下對床思我時

山居

山中閑侍白頭親　世上風波不顧身　環堵蕭然無儋石　繞籬野菜助清貧

偶成

自愛荒寒寂莫鄉　三衣什物坐禪床　微軀此外樂何事　九十老親猶在堂

深草の里に住なれて後

すまでやはかすみも霧もをり〳〵のあはれこめたる深草のさと

山家橘

くちはてぬなほり〳〵はとふ人の心にかゝる谷の柴ばし

平等院にて

はかなくてけうもくれけりあすしらぬみむろの山の入相のかね

折句のうたに冬のはな

ふみわけし雪のみやまののりの道はるけき跡に猶まようかな

深草の元政どの

## 歸雁

まよい出し人の心をふるさとにいざさはさそへかへるかりがね

其の頃熊澤藩山は幕府の老中にねらめられて、岡山藩より退き京都に住んだが、彼は音樂を好み伶人を友人に持つので、伶人を介して元政に交を求め、或る時は法華經の疑義を質し、或る時は梵語の意義を習ひ、或る時は源氏物語に就て說を徵しなどしたが、彼は甚しき佛僧排斥家でありながら、元政の前ではそれを謹むで居つた。そして元政を訪ぬるとき藩山は琵琶を彈じ、小倉少將は琴を彈じ、元政は和歌を作ると云ふ風流の遊を重ねて悠々として居つた。此の事に就て蜀山人は一話一言に「深草の元政法師眞實道心の佛者にて、人柄もよかりしかば、おしくおもひ、少し導しかども輪廻の見ふかく、其の上世に釋迦のやうに尊られしかば變じがたく見えし故に其の後は不言、歌書の事などにて友とし遊たり」。右熊澤了海孝經外傳或る間に見えたり、熊澤氏元政法師と交りし事しるべし。と記して居る。



此の時石川丈山もまた京都に居つた。彼は元と德川家康の旗本で驍勇無双の譽があつたが大阪陣の時、拔群の武功のあるに係らず、家康の軍令に背いたと云ふ廉で退けられたので、京都の一乘寺に隱れて詩仙堂を作り、支那の詩人三十六人の詩を書し其の像を畫きて、之を壁上に揭げたことは人も知る所である。

然るに此の時、明人陳元贅なるものもまた京都に居つた。彼は水戸藩主に聘せられた、朱舜水などゝ同じく、明の朝廷が、北から來たる清朝のために滅亡したのを憤慨して日本に生を托したものであるが、元政が母を奉じて身延山に上る途中、名古屋を經過したとき陳元贅と遇合してから兩心相許して元贅は京都に來たのである。然るに石川丈山は或る時、自から作る所の詩を書し印を捺して陳元贅に贈つたが元贅は之を剌つて、凡そ文字を書して印を捺す

のは、之を受くる人をして之を壁上に掲げ、或は人に示して珍玩せしめんがためである。今丈山がその文字を珍重せしめんとするは笑ふべしと云つた。

（翁草）かるゝ大見識の陳元贅も元政には深く許す所があつて元贅一句を作れば、元政之に和し、元政一詩を誦ふれば、元贅之に和す、といふ風で、數百首が出來たので、元政の元と、元贅の元とを合して、元々唱和集と號して一冊子を作つた。元贅が此の和唱集に添へた序文は左の如くであつた。

政公の詩を玩繹するに、其致、幽玄、清逸、爽朗、透脫、方の内に入り方の外に遊び、自から一家を成す、蓋、人、其の詩の如く詩、其人の如し。

此の文は獨り元政の詩を論ずるのみならず、元政の人物を傳ふるものである。

元政の父は、八十七歳にして終つたが、母は七十九歳の時、身延山に參詣したしと云ふので、元政自から母を奉じて、身延山に參詣したが、その後八年にして母は枯木の折るゝが如くにして終つた。然るに母の死せしより二七日にして、元政また病み、寛文八年二月四十六歳にして死去した。

深草の眞宗院は淨土宗深草流義の本寺であるが、元政は其の中興の慈雲上人と共に遊行して居つた。門戸の見などは彼に取りては寸毫も存在しなかつた。

支那の學者が武士に刀兵の氣なく、學者に寒酸の氣なく、女郎に脂粉の氣なく、僧徒に香火の氣なくんば、一番の別世界換出せんと云つたが、日本でも味噌の味噌くさきは、上味噌にあらず、坊主の坊主くさきは眞に坊主にあらずと云ふ言葉がある。余は深草の元政に於て、實に坊主くさからぬ高僧を發見したのである。

（昭和十四年十一月　中央公論）

# 白拍子たけ女の道の記に就て

# 白拍子たけ女の道の記に就て

我國には平安朝以來、文筆により才名を歌はれた婦人は數千人と云つても足りぬ位である。此の事は恐らくは世界に稀有のことであらうと思はる。支那にも女詩人として、其の作品を後世に遺すものがある。例へば唐の女道士、魚玄機の詩が、僅かに五十首ながら唐女郎魚玄機詩として傳らるゝのを初として、婦女の詩の、歴朝の選集に入るもの少なくはない。併しながら到底我國の女性歌人が數千人を數ふるほどの盛觀はない。唯だ我數千の才女多くは三十一字の歌に生命を托したもののみである。例へば筑紫の遊女である

檜垣の嫗は、太宰大貳藤原興範が熊本の白河の邊で道に迷ふて水を此の嫗に乞ふた所が、水を差し出して卽座に『年經れば我黑髮も白河の、みづはくむまで老にけるかな』と歌つたとのことである。そして興範は之を憐みて後に衣服を彼女に贈りたりと云へば、此の嫗は見すぼらしき衣裝して、道の邊に徘徊したる老遊女であつたであらうことが想像せらるゝのである。かゝる窮境にある遊女すらも、其の作つた歌は、集められて檜垣の嫗集と名づけられ、後には群書類從の中に收められてある。之は其の一例であるが、その作りし一句、一首のために、その姓名を永く天地の間に留むる婦人は指をり數ふる暇のない位である。唯是等の婦人の才は、和歌にのみ向けられて、散文に得意のものが多くない。從つてその思想は直感的であり、頓悟的である。散文の樣に比較的でなく、博通的でなく、推理的でない。

文學によりて名を後世にまで遺したる數千の才女の中で、散文を書いたものは、源氏物語や紫式部日記を書きし紫式部、蜻蛉日記を書きし太政大臣藤原兼家の妻、和泉式部日記を書きし和泉式部などを初として、日記や物語ものに於て、各々其の才學を示して居るものも、ないではないが、其の數は極めて少い。

徳川時代に至りて、散文に於て智力的優越性を示した女性が多少出たが、その優秀なるもの四人を數ふることが出來る。

その第一人は讃岐の丸龜藩士井上儀左衞の女通子であつた。通子は少時から文學を好むので、江戸の藩邸に住む藩主京極高豐の母で文辭好きの養性院が、之を江戸に召して日夕左右に侍べらしめた。天和元年(今より二百五十八年前)十六歳で始めて江戸に出るとき東海紀行と云ふ日記を書いた。その後江戸日記を著はし、最後に元祿二年江戸から郷里丸龜へ歸るとき歸家日記を書いて、その才藻を示し一時の評判を取つた。此の時彼女は二十四歳であつた。文章も中々上手で、學問もあつたが、儒學に深入りして其の五七言絶句

なぞ誦吟するに足るものが少なくない。その他漢文も書き、賦も作り、數千首の和歌を殘して居る。右の中歸家日記は、正德六年、京都の柳枝軒と云ふ書肆が之を出板した。之はその書かれたる後二十八年目である。通子の才名の早く江戸に響いたのは、藩主の母養性院が之を保護推輓したためであると云はれて居るが、通子位の儒學・和學があれば、如何なる境遇に居つても、その錐錐を露はしたに相違ない。後藩士三田某の妻となりて子弟を立派に教養した此の點に於て失行の多い平安朝の才媛と終始を異にして居る。

その第二は伊勢山田の御師慶德三郎大夫の妻荒木田麗子である。麗子は家庭の兒女として柔順聽從申分のない女性であるのみならず、裁縫を初めとしてあらゆる女工にも通じたが、餘暇を以て書史を讀み、和歌を學びて、聲名一時に聞ゆるに至り、作る所は數百千首の和歌の他に月の行衛、池の藻屑の二著がある。月の行衛は高倉・安德兩皇の物語であり、池の藻屑は、後醍醐天皇より後陽成天皇に至る八・九十年間の物語である。從來王朝の修史事業が疎略にせられてから、宮人や貴族によりて、物語風の歴史が書かるゝようになつて來たが、それは水鏡であり、大鏡であり、榮華物語、今鏡であり、續世繼物語であり、增鏡である。斯くて貴族の書き殘したる物語本は、增鏡で終り、朝廷の正史のないのみならず、私史としての物語さへも作られぬようになつた。荒木田麗子は此の增鏡を繼ぐべく書いたのが右の二書である。

第三人は德川五代將軍綱吉の殊遇を受けし柳澤出羽守吉保の妾、正親町大納言實豐(或は公通)の女町子である。町子は實は鴨の神官梨木祐之の女である。吉保は君寵を一身に集め、威權爍々として江戸城中に耀くので、實は歴代の將軍が公卿の女を夫人とするに比擬して、公卿から夫人を迎へんとするの心持もあつたが、已に妻のあるので左樣のことも出來ず、鴨の神官の女を正親町大納言の養女として、之を申し受けて妾となし、聊かその虚榮を滿足したの

である。偖て此の町子の父、祐之は國史らしきものを編纂したる位の學問があるので、町子も自から文才淺からず、柳澤の家に入つて後、松蔭日記なるものを編述した。柳澤は已に松平姓を名乗ることを許され、且つ德川氏の下に榮えたものであるから、松のお蔭によりて身を保つと云ふ意味から、その著述の名としたもので、之は將軍を中心とする江戸の物語である。町子が江戸に下つたのは十六歳の時で、四郎・五郎の二人の子を生み、全く江戸の人となり切つたようなものゝ、猶ほ文章や物の見方に、京臭の去り難きものがある。

その第四人は道の記を書きし武女である。偖て此の四才女の中、學才に於て、文字に於て、武女は最も優つて居る。此の武女は姓氏も分明ならず、素姓も知れず、唯だ彼女が名古屋から江戸に歸る間の旅行日記に道の記と題するものがある。それによつてその人を想像するのみであるが、其の文章高古にして才藻に富み、文字清麗にして讀書學問の淵源があり、紫式部や赤染衛門などに比して優るとも決して劣るものでない。

道の記の書かれたのは享保五年であつて、中御門天皇の御世に方り、江戸では六代將軍德川吉宗が國柄を握つて居た時であつたが、固より人に示す爲でなく、唯だ何となく書かれたものであるから、之を知るものは少數の知人であつたらしい。そして學者が之を發見して評判するようになつたのは、今より百二・三十年前の文政年間で、それを和學者の棟梁である清水の濱臣が註釋を附して出板してからである。道の記が書かれてから濱臣によりて發見せらるゝまで已に七・八十年を經過して居るが、濱臣が之を發見した當時でさへ、武女の素姓・位置・閲歴が分明でなかつたが、其の行文中に、身分の高からぬことだけは暗示せられてある。此の記行文は二月二十七日の曉に名古屋から啓行したことから書き起してあるが、其の文中『あまの子のよるべなき身は、きそう水に任せて、西に流れ東へさすらひて、つひのをはりさだめかねぬるぞ、哀れ

にも淺ましきわざなる』と云ふ文字があり、彼女が鎗や、さすまたなどの武器を並べたる箱根の關所を越すとき、關守の武士が餘り嚴峻なる尋問もせずに通行を許るしたることを敍述して『遊びくぐつ(傀儡)の類は、人のほかなる定ありとて、いささかのさわりもなく通し給ひつ』と記るしたるを見れば、關所では旅の女藝人の樣な取扱を受けたことが分る。此の女藝人の樣な取扱を受けし女詞客は、三月三日金川、品川を經て芝に入り、其の夜は『御館にありて二夜を過ごし、三月五日ふるき家居にかへりぬ』と結んで居る。其の終りに父が佐々目から出て來たことが記してある。濱臣の解釋によれば、佐々目は今の浦和附近の蕨の邊にある村落なりとの事なれば、此の草深き田舍から江戸に出で、其の才藝で、俠門に入つたものであるらしい。

武女の文は淸麗にして高古であるが、それが如何にも自然であり、多くの和學者の作る擬古文のように、不自然な寄せ木細工のような所がない。彼女は女藝人であつたか、浮かれ女であつたか、俠門の妾婦であつたか分明でないがそれが蕨あたりの農民の娘であつて、平安朝の才媛のように貴種でないことは確かである。道の記の書かれたとき、彼女は三十歲であると自白して居るが、名古屋に居ること七年であつたと云へば、二十三歲の時名古屋に遷されしものであらう。若し彼女が俠門の妾であつたとすれば、其の讀書修養は此の七年の間であるらしく思はれるが、それにしても、七年間にあれほどの學殖が出來たことが、また一つの不思議である。

道の記は劈頭『女は境をこえずとこそ、ふるきふみにも出つ』と書き出して居るが、之は禮記壇弓篇にある文字なれど、それを禮記などと云はず、唯だ古き文と云つたのは、衒學的でなく心ゆかしく思はる。

以下所々に典據のある文字を使用しながら少しも學問自慢に、古典の名などを引用せざるところが、如何にも心ゆかしく思はれて、その人品が今からも

想見せらるゝのである。

昔し唐の賈嶋が、久しく井州の旅先で故郷、咸陽を回想しながら、井州から更らに他の土地に向つて桑乾河を渡るとき、却つて後の方に井州を望みて、離れがたき感懐を生じて左の詩を作つて居る。

客舍井州已十霜　歸心日夜憶咸陽　無端更渡桑乾水　却望井州是故鄉

然るに武女は東海道の新井渡を渡るとき、此の詩を借用し、左の如く改修して自家用として居る。

客舍尾州已七霜　歸心日夜憶東陽　無端更渡新江水　却望尾州是故鄉

東陽は當時の漢學者が江戸を呼稱する文字である。武女がかく漢詩を誦するや『をこなりとて舟こぞりて笑ふ。なにかさのみにおもしめたまうらん、才も不才もみな故鄉一つはもたるをといふを、又た笑ふもをかし』と武女は記して居る。

此の才も不才もの字を註して、濱臣は論語先進の論にありと云つて居るが今日の文章家が雜學的に文字を濫用するに比して、彼女の文字は、相當に出典があるらしい。武女は散文として申分はないが、和歌もまた拙からず

さらでだに毛をふき疵をもとむ世に　見附宿にて

見つけといへる里の名ぞうき

濱松にあらしふく夜はことさらに　濱松宿にて

大君きませいざ二人りねん

右に云ふ大君と云ふのは、平安朝時代に貴族の長女を稱した言葉で、本居宣長の玉勝間によれば、古代にありて公卿などの娘たちの中で一の姉を大君とも姫君とも云つたとのことである。かゝる些事すらもたけ女の用字には必らず典故があつた。

若し武女をして江戸の大奥の才媛ならしめ、其の見聞する所を自由自在に

書かしめたらば、榮華物語以上の述作が出來たであらうに殘念なことである。

清水の濱臣によつて武女の旅行記が公にせられたことは以上記した如くであるが、此の旅行記には春海や、千蔭等一代の大文學家が序文を書き、濱臣は武女を以て或る權勢家の側女であるかの如く書いて居るので、それが當時の尾張藩主の妾であるが如き感じを世間に與へた。享保頃の尾張藩主に宗春公と云ふ人があつた。此の宗春公は豪放濶達で御無理御尤もの常憲を超越して德川宗家の重臣から睨まれる一面には江戸吉原の海老屋と云ふ妓樓の春日野に心醉して、放埒を盡くしたと云ふことが近代公侯嚴秘錄に記され、また吉原に模して新たに遊興街を名古屋に興したと云はるゝ人である所から直ちに此の武女は宗春の思ひ者であつたかの如く傳ふる者もある。併しながら時代年月を計算するに、宗春は武女の名古屋入りし以前の人であるので此の說は事實にあらぬ浮名であるらしい。

余は此のことに就て、定めて名古屋の德川家に、何等かの傳說がありはせぬかと思ふて、德川義親侯を訪問してその說を叩いた所が、多少の手がゝりが出て來た。侯は藩士橫井野有が道の記の卷末に手記したる記事を引用して、武女のことを余に告ぐる所があつた。其の記事によれば、尾張第四世の藩主に吉通と稱せられた人があつた。その夫人は、九條輔實の女である、享保十六年に逝去し、圓覺院夫人と稱せられた。武女は初は三萬五千石ほどの、或る小大名の家に仕へしが、後に圓覺院夫人の侍女となりしものであるさうである。尾張の橋田勘之丞の伯母にして安永六年頃まで生存したる八十餘歲の尼あり、武女と同じく尾張侯の大奧に居たが、その說に武女は武藏の生にて、物などよく書きし人なりしと語りしと云ふ。

橫井野有は本名孫右衞と云ふ名古屋藩の大身で、野有はその俳名であつてその著す所の「鶉花」は弘く世に行はれたが、後也有と改名した。かゝる位

置の人であるから、その記す所は、信憑すべしと思ふのである。唯だ也有の說によりて武女は面首を以て進んだ妾婦でないことだけは分明したが、その姓字の分明ならぬのは遺憾である。

侯はまた野有の手本にありし道の記を余に示し、濱臣の公刊したるものに所々字句に增減變更のある所を指摘し、多分濱臣が勝手に改竄したものらしいが、原文の方生氣がありて、改竄したるもの、却つて劣ると云はれたが、余もまた同感である。そして也有は、左の如き跋を書して居る。文章才學、紫式部、清少納言に勝るとは流石に文學を以て鳴りし人だけに活眼と云ふべきである

筆力英才壓紫清　爲憐漂泊不平鳴　江州司馬潯陽淚　千歲傳來倫此情

紫式部や清少納言に勝ると云ふのは、獨り顯はるべくして顯はれずに終りし不幸なる才女に對する同情のみの語のみでない。蜻蛉日記にせよ、和泉式部日記にせよ、紫式部日記にせよ、或るものは、己の戀愛や怨恨を書いたものであり、或るものは其の知人の戀愛や愁恨を書いたものである。その主客の別はあつても、文章の主題は戀愛の葛藤、愁恨の紛擾である。然るに武女の道の記は、寸毫も戀愛葛藤がなく、平易なる日常の旅行日記に過ぎずして、人をして讀み去り讀み來つて、嗟嘆せしむるものがある。また源氏物語や榮華物語が後世の學者の興味を引く所以は、その作者の才學のためのみではない。其の記事が九重の雲深き宮中の生活を敍述して、下界のものが知らんと欲して知る能はざることを傳へたことと、其の作家が貴族社會の一人であつて、其の目で見、耳で聞いたことを書いたので、如何にも人の心を引きつける二點であることを忘れてはならぬ。若し貴族の出身でもなく、其の記事が宮中の秘事でもなく、素生の知れぬ一女性が尋常平凡の旅行日記を書きしものが、平安朝の才媛に勝るとも劣らぬ所ありとせば則ち如何。是れ全く其の才學の力であると云はねばならぬ。

偖て武女の事は、茲まで檢索せられて其の姓字すら分明でない。因つて余は金澤冬三郎君が埼玉縣人である理由によりて、此の日記の末尾にある「めゝ」と稱せらる土地に就て舊事を調査せんことを同君に委囑した。そこで金澤君は鄉里の知人親族を總動員して之を調査したが、一も得る所がないのは、甚だ遺憾である。

武女の日記が公刊せられたとき、武女の名の上に白拍子と云ふ字がある。横井也有がその友人の家に於て發見したる寫本にも、同じ白拍子と書いてある。白拍子なるものは平安朝の末期頃までは實際に存在したる官妓のやうなものであるが、德川時代に至りては、文字の上に存在するのみで、實際に於ては滅亡したるものである。文字の上でも源平時代の過去の女性を記するときに使用せらるゝもので、現實の上に應用せられざる文字である。何故に武女は自から白拍子と稱したるか、名古屋藩の舊事に通じたる人の說によれば武女は狂言方として圓覺院夫人のお側に侍べりしものであると云ふ。狂言方とは卽ち遊藝師であるから武女は三味線や舞踊で大夫人に仕へたものかも知れぬ。そこで彼女は昔から白拍子として名高き靜御前や伎王などのことを聯想して、自から白拍子と稱したるものかも知れぬ。

武女の才學は右に言へるが如くである、その技藝もまた秀出したものであるらしい。それが今日に至るも姓字も知れず、其の文字以外のことは傳はつて居らぬ。之を平安朝の才女の姓名が、千歲の後まで語り傳らるるに比して如何にも憐傷すべきことに思はれ、才女にもまた遇不遇があり、幸不幸があると嘆聲を發したい心持がする。併しながらまた更らに一考を要するものもある。

彼女は四十歲前後で名古屋侯の門を去つたらしい。そしてその後杳として聞ゆる所のないのは、江戸で何人かに嫁して、尋常の婦人として、良妻であり

賢母であり、平正の生活を以て一生を終りしものであらう。此の才女ほどの技藝を有しながら、何の波瀾もなく、何の變化もなくして、終りしところ、却つて其の人物の墓はしさが想像せらるゝのである。然らば則ち、かゝる才藝を以て姓名堙滅して、傳はるところなきは、憐むべきが如くして、却つて、羨むべきものかも知れぬ。昔支那の詩人は人間の一生を花枝に比し桃の紅、李の白、薔薇の紫、各〻自から優越を感ずるも、大自然の目より見れば一切平等であることを左の如く歌つて居る。

得莫欣々失莫悲　古今人事似花枝　桃紅李白薔薇紫　問着春風總不知

余は武女の姓名堙滅して傳はらず、紫式部や清少納言の名の喧傳せらるゝを見て、此の詩を朗吟するの已むべからざるを感ずるものである。

（昭和十五年一月　武女道の記）

# 西安に於ける日本人の遺跡

# 西安に於ける日本人の遺跡

我が飛行機は昨年、支那の西安を初として、延安、膚施などを爆擊すること、一再ではなかつた。此の西安は陝西省にあつて黄河が、北から流れ來つて、東方に屈曲する曲り角とも云ふべき潼關、風陵渡などと遠からぬ邊にある。

新聞の讀者には、一昨々年、張學良が蔣介石を拘禁した場所と云ふので、朧ろ氣に記憶せらるゝのであるが、實は千有餘年前から日本とは因緣の深い場所である。

西安は、卽ち昔秦の始皇帝が、四百餘州を一統して、阿房宮を建てた感陽の都

などに近い土地で、唐の時代に長安と稱した所である。支那の都は代に從つて變るが、長安ほど、日本人の耳に親しみを感する所はない。

それは長安の大道、砥の如しとか、長安一片の月、萬古、衣を砧つの聲とか、唐詩選などに、長安を主題とする詩が多いばかりでなく、奈良朝、平安朝の留學生、學問僧などは、長安で學問修業を積み、歸朝して、その蘊蓄を傾けて、之を政治上に實行したので、長安は東洋文明の中心であり、識者渇仰の標的であつたからである。

我國が、自から國號を定めて日本と稱する樣になつたのは、天智天皇の御世であつたらしいが、此の頃の支那は、已に唐の時代で、其の制度、典章、文物、風俗が我が識者の憧憬する所となつて、屢〻朝廷から學生や僧侶を唐に派遣した。

全國の土地を百姓に均分する大化の革新や、朝廷の制度を立てた大寶令などは、之等留學生が、長安で見聞修學した結果なのである。

その後、留學生や學問僧の派遣が、一轉して遣唐使となり、三・四年、若くは六・七年ごとに、必らず一隊の使節を長安に派遣する習慣となつた。

孝德天皇の白雉四年（西曆六百五十三年）には、二回遣唐使を出したが、二回とも留學生一百二十人づゝ之に隨從した。靈龜二年といへば（西曆七百十六年）サラセン人が南歐を征服した頃で、支那では後に楊貴妃で名高くなつた玄宗皇帝の開元四年であるが、此の年、多治比縣守を遣唐使として、長安へ遣はした。

其の時吉備の眞備、安倍の仲麿及び僧玄昉が、其の隨員となつて同行し、一行は五百五十七人と云ふ大勢であつたが、此の一行は長安に居ること數年にして歸朝し、天平勝寶四年に吉備眞備は、再び遣唐使となつて藤原清河と共に長安に行くこととなつた。

然るに十數年前、多治比縣守の隨員となり長安に行つたものゝ中、僧玄昉は已に歸つて孝謙天皇の宮中に入り、其の才學によつて、大に用ひらるゝに至つ

たに係らず、安倍仲麿は日本を出た時は十六歳の少年であり、最も感受性の強い青春の時を長安に費し、長安を第二の故郷と思ふ樣になつた。

その中に皇弟儀王なども親友となつて朝廷に羽を伸ばし、遂に秘事監と云ふ官に就き、玄宗皇帝の命によつて、姓命を改めて晁衡と稱し、李白を初めとして一時文壇の大家と親友となり、互に應酬するほどになり、中々歸朝が出來なくなつて了つた。

併しながら、流石に日本人である。月を見ては、望鄕の念、沸々として湧き出して「天の原ふりさけ見れば春日なる、三笠の山に出し月かも」と云ふ歌を作つたのである。

當時、唐の朝廷は日本の留學生を歡待したものらしく、粟田眞人が入唐したとき、朝廷から四門敎授趙玄默に詔命が下り、眞人を鴻臚寺に於て敎授せしめた。鴻臚寺とは、外務省兼外國貴賓館と云ふやうな殿局である。そして粟田眞人は、束修として大幅布を趙に呈したと云ふ記事がある所を見れば、奈良朝時代に於ては、我國にも已に大巾の織物が織られたものらしい。

然るに天平勝寶の年、藤原清河が遣唐大使となつて、長安へ遣つて來たので仲麿の晁衡は久しぶりで、故國の時事を耳にして、歸心矢の如くなつて來た。幸に玄宗皇帝は、晁衡の心を察し、晁衡に唐の朝廷から日本へ送る使節の任を命じたので、天平勝寶五年唐の天寶十二年愈々日本に向つて開帆したが、當時王維、包佶、趙驊などの大詩人は、詩を作つて仲麿を送別したのである。

晁衡も愈々別を友人に告げ、日本を出るとき腰に帶びた名劍を記念として友人に贈り、次の如き詩を作つて志を述べた。

命を銜んで將に國を辭せんとす
非才、侍臣を辱ふす
天中、名主を戀い

海外、慈親を憶ふ
伏奏、金闕に違ひ
肆驂、玉津を去る
蓬萊、鄉路遠く
若木、故園に隣なる
西を望む恩を懷ふの日
東に歸る義に感ずるの時
平生の一寶劍
留めて贈る結交の人

然るに愈〻日本に向つて開帆すると、卒然として颱風が起り、何處へとなく船を吹き飛してしまつた。

此の報告が長安に達したときは更らに晁衡は水中に溺死したと云ふ報告



となつた。友人李白は之を悲しんで詩を作つた。

日本の晁卿帝都を辭し
征帆一片蓬壺を繞る
明月歸らず碧海に沈む
白雲愁色蒼海に滿つ

然るに仲麿の船は、安南邊へ吹きつけられ、九死の中に一生を得、千辛萬苦の末、數年を費して長安に歸つた。

已に死んだつもりの晁衡が生還したので、朝廷は大に之を喜び、光錄太夫、兼御史中丞の官に任じ、食邑三千戸と云ふ大祿を賜ふて、北海郡開國公の爵を與へたが、二年を經て安祿山の叛亂が起り、玄宗皇帝は西蜀へ蒙塵したが、寶龜元年仲麿は七十三歳で支那に客死し、そして朝廷は潞州(安南)大都督の號を追賜した。

仲麿が入唐した時は十六歳であつたから、五十七年の間、長安で生活した譯である。その間には唐人の妻もあり、子もあつたであらうことは、奈良朝から遺族に對して賜與のあつたことでも想像せらるゝのである。

余は茲に仲麿の傳を記さんとするものではない。唯だ奈良朝から平安朝へかけて、唐の長安が、東洋のメツカであり、聖地であり、文明の中心であり、此の中心に行くために、あらゆる苦難を犯したものであることを記さんと欲するからである。

奈良朝時代に於ては、我國の船舶は先づ遼東から渤海に向ひ、それより山東角に轉じて、蘇州・杭州へと渡つたものであるが、船の小弱と、航海技術の貧弱のために、危難が多かつた。

天平四年、東海・東山・山陰・山陽・西海の諸國に詔して、米穀百石以上を積み得る船舶を作らしめたが、當時の船舶の小弱なること實に此の如くである。場合によりては、新羅の船を雇使することもあつたが、之とても小弱なものであつた。

遣唐使藤原清河の女喜娘が大伴繼人等と共に支那から歸るとき、暴風に吹き飛されて天草に漂着したが、津守國麿の乘つた一艘は甑島に漂着した。

之は唯一例であるが、難航は毎々であるので、平安朝に至り、菅原道眞が非常の海難を干して、支那に人を送るの必要なしと建白したために、遂に遣唐使は廢止せられたのである。

陸路もまた容易ではない。楊子江若くは黃河から、水運によつて長安に行つたであらうと想像するものあらば、それは全く誤謬である。

唐の德宗の貞元二十年は日本では、桓武天皇の延曆二十三年であるが（西曆八百三年）此の時に入唐した弘法大師は五月に日本を出發して八月衢州の境に着した。

其の長安に入つたのは十二月であるから、支那に上陸してから長安に到るのに、四ヶ月を費したのである。

彼等は何のために此の苦難を干したのであるか。唯だ文明を採らんとする向上心からであつた。

然らば則ち日本の朝廷と唐の朝廷との關係は如何なる性質のものであつたか。

弘法大師が延曆二十三年遣唐使金紫光祿太夫藤原賀能に從つて入唐したとき、大使に代つて福州觀察使に與ふる書を起草したのが、性靈集に載つて居るが、其の中に左の寫がある。

執蓬萊珠、獻崑山玉、起昔迄今、相續不繼、故今我品主、顧祖先之貽謀、慕今帝之德化、謹差大政臣、右大辨、正三品、並行越前大守藤原朝臣賀能等、充使、奉獻國信別貢等和(中略)面對龍顏、自承鸞編、佳門榮寵、已過望外

右の文中に別貢の文字があるので、日本が唐の朝廷に對して貢物を納めて附庸の地に立つたと思ふ者があるならば、それは誤解である。

此の頃朝廷に於ては、國民的自尊の念が熾烈になつて前項に記した安倍仲麿が長安に客死したとき、朝廷からその遺族に金品を下賜せんとしたるに、朝臣の中に、仲麿は唐の朝廷に仕へて、その官爵を受けたものであるから叛臣である。叛臣に物を賜與するの必要なしとの議論が起つたほどである。

また之より先き天智天皇の三年(西曆六百六十四年)に唐の朝散大夫上柱國郭務悰なるものの一行三十人が、來朝したので、我が官吏が之に應接した所が、天子の使者にあらずして、實は勃海鎭將の私使に過ぎず、携ふる所の文書も、また唐の天子の書にあらずとの理由で、郭務悰は朝廷に延見せられず、また復牒を與へざることゝしたのである。

斯かる狀態であるから日本は唯だ先進國に對する敬意を表するだけで、貢

物と云ふものも、所謂手土産に過ぎず、決して後年足利義滿が明の封冊を受けて、官爵を假るの類ではなかつたのである。

仲麿以後、幾回か遣唐使が發せられ、幾多の學問僧が渡唐したが、その中でも最も有名なのは高岳親王の渡唐である。高岳親王は嵯峨天皇の皇太子で、皇兄平城上皇の實子である。

然るに此の時宮中の貴族の權力爭奪と、平城上皇の尙侍、藤原の藥子の陰謀から、天皇上皇の間に隙を生じて內亂となつた。皇太子は幼少であつて此の事件に何等の關係もないが、結局皇太子の位を廢せられて、在原の姓を賜つて臣下の籍に入つた。

文學上に有名なる在原業平は、此の高岳親王を叔父と仰ぐものである。その後、親王は弘仁十五年京都の東寺に入り、眞如と云ふ僧名を持つた。その小栗栖に住むために世に山科の御子とも稱し、國史には禪師親王と書かれて居る。

その後思ひ立つことがあつて、貞觀三年飄然として長安に赴いた。貞觀三年は唐の文宗の時代で、文學上から云へば、白樂天・韓退之・柳公權などの時代であるが、政治上から云へば、已に衰世に向つたときである。此の時、眞如上人は已に五十五歳の老人であつたらしい。

五十歳の老僧何の求むる所あつて長安に行つたか。幼年にして皇太子となり、何の知る所なくして、皇室の違變に會ふて退けられて庶人となる。是れ已に人生の最大悲劇であるが、幼少の王子は、小鳥が梢より梢に遷るが如く、何の哀愁もなく、無心にして此の間に進退した。

然るに東寺に入つて僧侶となりて後、稍ゝ物心のつく頃に至つて、漸やく自家は人生最大の悲慘事によりて、此の寺院に落ち來つたことを會得して、人生に向つて大疑を生じ、大哀を感じ、その解決を長安の名僧に求めんとして入唐

したものであらう。眞如上人は長安に在つて何をしたか記錄がない。唐代叢書と云ふ雜誌風の小冊子によれば、日本の王子、長安に在り、圍碁を好み、朝廷第一の碁師と碁を打ちたいと申し出たので、朝廷から碁師を出して技を鬪はしめた。但し朝廷第一の碁師を出して萬一敗北するやうのことがあつては朝廷の體面に關はるとの面子感から、僞つて第一級の碁師を第二級の碁師と稱せしめた。然るに王子は中々の名手で、朝廷の碁師と打分けで局を結んだ。

そして王子から、願はくは更らに第一の碁師と手合をしたいと云ひ出したが、王子の名手に驚いた宮內官は、王子に對して第二の碁師を完全に破つた上でなければ、第一の碁師と手合をさす譯に行かぬとの理由で謝絕したと記してある。

日本の皇族にして唐に入つたものは、前後唯だ此の眞如上人一人であるから、此の記事の王子とは、眞如上人のことに相違ないと思はるゝのである。

然るに元慶三年、學問僧、中瓘が唐より朝廷に奏報して、親王が安南に赴かんとして、途中羅越で虎のために害されたことを告げて居る。親王は何故に安南に赴かんとしたか。此の頃、唐の朝廷も段々と弱り黃巢の賊が已に至る所に勢力を振ひ、元慶四年には黃巢は已に長安を攻め唐の僖宗皇帝は奔りて、四川省の成都に幸すと云ふ狀態であつたので、親王もまた長安に居る能はずして、南方、安南を指して安住の地を茲に求めんとしたものか。

また承和五年と云へば、仁明天皇の御代で、西曆八百三十八年に當り、今より千百年前のことであるが、此の年、遣唐使藤原常嗣の一行に加つて渡唐したるものは、慈覺大師と號せらるゝ圓仁があり、幸ひ彼の旅行記が入唐求法巡禮行記と題せられて京都の東寺に國寶として保存せられて居る。此の慈覺大師の船は暴風に吹かれて、一行の他の船舶と聯絡を失し狼狽する間に楊子江に入り、鎭江の附近の地に到り、それより運河によつて楊州に入り、千山萬水を渡

りて長安に入つたのであるが、此の遺文を讀めば當時の旅行が如何に苦難の多かつたものであつたかが分明する。

右の如く、今日の西安は唐の長安であり一時は東洋文明の中心であつたに係らず、今や荒廢寂凉、共產黨の巢窟となり盜賊が哲學的の外皮を着けたソヴイエツトロシヤ南下の前哨地となつてしまつた。

昔「春風十里霸陵の樹、曉川一聲長樂の鐘」と歌はれた古都は「芳草自から宮殿の跡に生じ牧童誰か帝王の城たるを知らん」と云ふ殘壁となつてしまつた。

それは實に王公の墓の松栢が、摧かれて民家の薪となり、桑田が變じて碧海となるよりも甚しき變動である。

（昭和十四年十月　創造）

# 二千六百年間に作られた日本人の心性

# 二千六百年間に作られた日本人の心性

昭和十五年は神武天皇の創業より二千六百年に該當するので色々のことが思ひ起される。紀年歴史家は我國の悠久なる由來を述べんとする。建築家古實家は橿原神宮の様式、儀禮に就て述べんとする。傳記家は神武天皇輔翼の人々の物語や、姓氏の別などを述べんとする。併しながら二千六百年に際して余が最も肝要と思ふことは國家と云ふ思想の發達して今日の勢となつた由來である。

何れの地何れの民に於ても創草の世に於ては、人間と獸蛇との爭鬪時代が

あつた。偖て人類は此の長い人獸爭鬪時代にあつて、如何にして猛獸と戰つて全滅せざりしのみならず、着々と之を征服し得たかと云ふに、腦力が獸類よりも發達し、そして同族呼應して相團結し、團結の力によりて馳驅、攻防を巧みに行つたからである。此の時、已に人類には無意識の間に同族相結合し、進んで攻め、退いて守ると云ふ、一種の社會らしきものゝ萠芽があつたと云ふことが出來る。勿論同種族が相聯合し相集團するのは、生物自然の本能であつて今日に於ても至る所の村落で、怪しと思ふものを見たとき、群犬が之を圍んで吠ゆるが如く、當時のヒツポポタミや、象も、また同種族相集團して進退したものであるから、彼等の間にも一種の社會らしきものがあつたと云ふことも出來る。

右に云ふが如く、動物は其の本能によりて同種類のもの相集團するが、之は動物ばかりでなく、物質は多く同種相集合する傾向を持つて居る。海岸の砂場を歩行するものは、其の沙粒が千億萬、略〻同型で同比重であることを見るであらう。そして數歩海水中に入れば、そこには略〻同型、同比重の石塊が群を爲すのを見るであらう。地方によりては、沙粒の上層に眞黑な砂鐵が、一定の位置を占めるのを見るであらう。之は數十里の山上に在る砂鐵が、風に打たれ、雨に流され、數千年の間、谷を歩し、畑を行きつゝ、遂に此の海岸に集合したものである。詩人は萬物、皆な生命があり、生命は砂石に於て眠り、草木に於て覺め、人に於て活動すと言つて居る。此の語に眞理がありとすれば之等の物質に生命があり、生命の意圖する所によりて、斯くの如く同種相集團するものであるかも知れぬ。或は生命なく、唯だ波濤の力、風雨の力で、自然に同種のものが相集團するのであるかも知れぬ。が、兎に角、同種同類のものが一所に集團するのは自然の傾向である。學者は之を名づけてアグレゲイションの自然法と云ふ。此の傾向は物質に於ては自然の理法と稱せられて居るが、動物

に於ては本能の働きと稱せられ、渇するものが水を求め、飢たるものが食を求むると同一のことゝせられて居る。斯くて人類は初は無意識的に、本能の作用によりて相集團して居たが久しきを經た後、意識的に集團し、此の集團の中から方法が立ち、意圖が生じ、そこに一個の部落を生じ、部落から民族が起る。そして民族の利益を保護し、其の目的を達成し、民族内の利害を調節せんがために、一の政府を生ずるに至つて、國家が此處に生れて來る。

凡ての國の歴史は、國家が發生するまで、或る超人的英雄が、武勇を以て四方を征服したことの記錄でないものはないが、是は普通の傳記的歴史であつて部落から民族、民族から國家を起すまでの歴史に至りては、それに心理的説明を加へねば分らぬのである。心理的説明とは、その間に於て、人類の社會的本能が活動して、同類相集まり、異種相排し、遂に一個の民族性なるものを結成した働らきを跡づけることである。近世の歴史に於て、政治上に活躍したる英雄豪傑なるものは、唯だ舞臺に上つた一個の俳優に過ぎぬ。それをして活躍せしめたる作者は樂屋に居る。それは時勢の流れであると説明すると同じく、民族創成時代の超人的英雄も、また彼が意識すると、せざるとに係らず、其の時代の人類の社會的本能に刺戟せられて動いたものに外ならぬのである。

ダーウインの進化論が出てから、動物の動作を本能によりて説明することが一定説となつたが、本能とは何であるかと云へば、人類や動物が生れながらにして、知り、學ばずして覺ゆることを云ふのである。小兒は生れた日から、母の乳を吸ふことを知つて居る。之は誰が教へたのであるか。駒鳥が生れて數ケ月にして作る所の巣は、それが二・三歳の老鳥となつて後に作る所の巣と異ならぬほど完全のものである。鰻は塵氣の濃かな太洋の中心に於て生み落され、そして孵化するや、數百千里を隔つる眞水の川に向つて泳ぎ寄り河を溯り、池に入り、湖水に潜み、受胎するやまた數百里の流れを下りて海に入りて放

卵する。それは誰が教ゆるのであるか、皆な生れながらにして備はる本能の力である。此の本能は如何にして動物に備はるかと云へば、數十萬年前から其の生存に必要な動作であつたものが、其の種族の間に保存せられたものであつて、また種族的遺傳と云ふ外に説明の出來ぬものである。

動物は本能によりて動作すること右の如くであるが、若し或る動物に同族相寄り、同種相引く社會的本能がなかつたならば、それは早く滅亡したであらう。雁は數百羽、群をなして湖上に眠るとき必ず一個の先衛が眠らず四方を警戒する。そして蛇族、猫族若くは人類が雁を捕へんとして接近するとき、先衛が警戒の音を發して群雁を眠から呼び醒ます。鹿が曠野を行くときは、男鹿が先頭に立ちて圓陣を作つて外敵を警戒する。動物は其の發達の程度が高ければ、高きほど、集團的生活を營む社會的本能が、より濃かである。

社會的本能とは何であるか。譬へば或る國民が、他國より襲撃せらるゝ場合に、政治家は同族を結合聯集せしむるために、唇亡び齒寒しと云ふ文字を用ひ、或は今日は人の身、明日は我が身と云ふ言葉を用ふるが、原始時代から動物は已に斯くの如き文字や言葉で示さるゝ樣なことを感知して居つた。

それは同種の動物が、相伴ふて他の動物から攻撃せらるゝことがある。その時攻撃を受ける動物を傍から助けずに通過すれば、その動物が食殺される後、必らず己の身が第二に攻撃せらるゝのである。かゝることが數十萬年の間に經驗せられた結果、同族の攻撃せらるゝときは、角を揮ひ、齒をむいて、共同戰線を張ることを覺えた。かゝることが一の遺傳となつたのが社會的本能である。そして人類はその中で最も多く社會的本能を備へて居る。それは所謂る萬物の靈長と云はるゝほど他の動物と懸絶した地歩を占むる所以である。

人類は斯くの如くして、その社會的本能により、同種相寄り、同類相集まり、此

處に同一の生活が營まれ、此處に一種の文明が生じ、此處に一個の民族を生じ其の民族が個人に於ける人格に比すべき性格を具備するものを名づけて民族性と云ふ。故に民族性の起原は同型、同種、同類の人類の間に限らるゝのが普通であり、其の附近に於て稍〻異なりたる種や、型や、類があつても、何時の間にか、之と同化するを常とする。斯くの如くして國家は民族の礎石の上に發生するのである。

故に國家は自から生長したものであつて作られたものではない。數人の力征によりて製作せられたものではない。珊瑚島は同一の祖先から出た生物が、同一の潮流の中で、同一の海溫の下に、無意識的に相集團したものであるが如く、國家は自然の發生物である。然らば卽ち四散五落の人類が、同種を愛し、同類を好み、同型に就くと云ふ社會的本能がその原動力である。此の本能は他人に對する同情となり、他人の危難に際しては、敢然として進んで之を助くるの高義となり、他人の善行を見たり、嘉言を聞いては感服する嘆美心となり、他人の嘆稱を博せんが爲に苦難を忍ぶの心となる。此の本能はまた外敵に對して協同一致して之に當るの心となり、其の協同一致のために規律に服し、命令を守るの心となる。斯くの如くして民族は其の民族中の人々の個々の情緒によつて結成せらるゝものであつて、決して理性や理論によりて結成せらるゝものではない。そして民族が國家を樹つるや、國家は其の民族の生活を統一し、過ぎたるを矯め、及ばざるを足し、一人の過大の自由を制限して、他の人民と相侵さゞる程度に之を規矩し、平和と進歩を保つがために、其の命令に服せざるものを刑罰するの法權を揮ふ。而して民族を他の外敵から保護するがためには武權を揮ふ。故に民族結成の力は情緒であつて、理性でなきが如く、國家成立の方法は權力であつて、道理ではない。

凡てのものが唯だ詠嘆せらるゝ時代があつて、之を文明史上で詩歌時代と

云ふのである。凡てのものが或る先達の説明するが如く、道理を窮むるの暇なくして信奉せらるゝ時代があつて、之は宗教時代と呼ばるゝのである。凡てのものが怪しく思はれ、空有に感ぜられて、從來の説明や信仰が疑はしく思はるゝ時代があつた。之は懷疑時代である。次に凡てのものに道理上の説明を加へ、以て始めて甘心せんとする時代が來た。今は其の半ばに居る。此の時代の弊は一切のものが理性に根據を持たねばならぬと思ひ、それがまた一個の迷信に陷つて居ることを解し得ぬ所が、その缺點である。親子は何故に相愛せねばならぬかと云ふ一事は、如何なる大學士も、理性上の説明を加へて人を甘諾せしむることは出來ぬ。併しながら如何に深遠な理由がなくも親子は相愛して已まぬ。之は情緒の問題であつて、理性の問題ではないからである。人は血緣なき他人に對して、何故に友人として情義を持たねばならぬかと云ふことに就ては、如何なる説明も與へ得るものはない。併しながら友誼は人間最高の美事として歌詠せられ、嘆美せられ、之を聞くものをして感激昂奮せしめて已まぬのである。何となれば之は理性の問題でなくして、情緒の問題であるからである。今や國家についても十分に、明白に、存在すべき道理上の説明を得なければならぬと思ふ人があるが、それは理性の問題でなく、情緒の問題であることを知らぬからである。嘗て文明時代とは、一切のことが理性によりて爲さるゝ時代であると信ぜられたが、今や道理と共に、高尚な情緒が文明の要素であると云ふことが唱道せられて來た。國家は人類が案出した計畫や、規模から出來たものでなく、人類が創世以來持ち傳へて來た社會的本能の結實として、自然に發生したもので、吾々に取つては善とか、惡とか、是とか、非とか、取捨選擇の自由のある問題でない。百川の流れが山を穿ち澤を渡りて結局大海に注ぐが如く凡ての人類は、部落から國家に向つて滔々として流れて行くのである。之は道理でなくして幾十萬年の前から宿命づ

けられた必然の勢である。

吾々の祖先が相共に集團して社會を作つたときは、その社會は單に人の集團であつた。併しながらそれが發達して部落となり、民族となり、遂に國家となつては、最早や單に人の集團のみではなくなつた。數萬年の間、吾々の祖先が共に熱日の下に耕作したこと、共に嚴寒の時に窮苦したこと、共に河水の氾濫に逢つたこと、共に噴火地震に惱みしこと、共に猛獸、毒蛇と爭つたこと、共に敵人と爭鬪したことは、其の間に輩出した英雄の偉業、偉人の苦鬪と共に一の宗教ともなり、理想ともなり、民族の精神を養ふ食料となり、民族の靈魂を昂奮せしむる神聖な力ともなつた。祖先の風俗、習慣、學問詩歌の總量である所の傳說は、集團個々の心性を化成して民族性を養成した。此に至りて國家は個々の人を離れて、總合的概念的の存在となり、個人を生む父母となつた。そして一個人に特異なる人格を備ふるが如く、國家もまた民族性と云ふ特異なる性格を備へて、一種の精神的團體となつてしまつた。

然らば則ちその國家とは何であるか。それはその山川原野の島嶼であり政府であり、同一形體と同一心性を有する人民である。同一歷史を有することであり、同じ祖國を持つことである。

然らば則ちその祖國は何處にあるか、我々が幼少の折、雉子や兎を追つて遊んだ林野にある。我々が少年の時、鮒やメダカと漁つたせゝらぎの小川にある。我々が牛や馬に荷物を負せて、夕陽を背かにして歸つて來た村の路にある。我々が朝に晩に聞いた寺院の鐘の音にある。我々の心を憤激せしめたる大戰の敗んで心を躍らした大戰の勝利にある。我々の思を往古に馳せしめる神社の拜殿にある。我々の舊るき北にある。我々の思を往古に馳せしめる神社の拜殿にある。我々の舊るき記憶を呼び起す陵墓にある。我々が自から成功を祝した所にある。我々が失敗を悔いた所にある。友人と分れた所にある。愛人と會ふた所にある。

三叉小品

我々の先人の傳說にある。神話にある。お伽話にある。但歌民謠にある。英雄偉人の傳記にある。我々の思ひ出多き所にある。要するにそれは我々の心の中にある。

（昭和十五年一月內閣發令　紀元二千六百年）

# 隨讀隨筆

# 聖德太子のみでない

今より約千三百年前、我推古天皇の朝に方り、小野妹子を公使として支那に派遣したことがある。支那は此の時隋の煬帝の時代で兩晉、南北朝の華麗浮靡な文化を誇りとする時であつて、固より日本などには大した注意を拂はなかつた。然るに此の時、我朝廷から隋の朝廷へ遣はした國書は「日出處の天子、書を日沒處の天子に致す」と云ふ書き出しであつたから、眼、一世を空うする煬帝は頗る不氣嫌で、自今蠻夷の書、禮なきものは奏する勿れと、外務省に命令した。此の一件は煬帝の憤怒するだけに、日本國民には好評で每々、自主的

外交辭令の標本とせらるゝ所である。

併しながら或る國民、或る種族が、一定の文明に達して、國民的、若くは種族的誇負の念が醸生せられたときは、外國との關係に於て、崇高偉大な文字を使ひたくなるものであつて、日本のみが殊に矜恃が高かつた譯でない。推古天皇時代より先だつこと八百年、漢の文帝の時代に、匈奴と云はるゝ、北方の蠻人から漢に送つた文書に「天地の生ずる所、日月の照らす所の匈奴の大單于」と書き出して居る。また小野妹子が以上の文書を呈したよりも、十年ほど前に、北狄の沙鉢略から書を隋の文帝に送るとき「天より生じたる大突厥天下の聖賢天子、伊利倶靈設莫何始波羅(名)汗(王)書を大隋皇帝に致す」と書き出して居る。

その後、宋の時代に至り、支那西藏山麓の小國于闐國王から、國書を宋の天子に送るとき、其首に「日出東方赫々たる大光西方五百里を昭見する國内條貫の主、黒汗(官名)書を日出東方赫々たる大光照見する四天下條貫の主、阿舅大官家に致す」と書いて居る。初の赫々たる大光は可いが、終りの阿舅は「ヲチさん」で大官家は旦那樣である。之では頭に瑤珞の冠を着けて、足にはナギナタ草履をはくやうで、滑稽に聞ゆるのは是非もないが、併しながら民族的の矜恃は矢張りその間に見らるゝのである。

推古天皇の朝に方り、世界の主人位に自惚れの強い隋の皇帝に對して、對等の辭令を用ひたことは大に可し。そしてそれが聖德太子の博學、見識に由來したことも、また承認せねばならぬ。但しかゝる國民的の矜恃は、獨り日本のみ、獨り聖德太子のみと思ふてはならぬ。推古天皇より八百年以前の匈奴は右の如く、同じく漢の文帝に對等の文書を送つて居る。歴史を讀むことは大切のことであるが、廣く世界の歴史を讀みて、比較研究せぬときは、却つて固陋、孤愚、偏見に陷りて、遂に神憑りの痴態を示すの恐がある。

# 萬里小路藤房の足跡

熱海に溫泉寺と云ふ古刹がある。その山門の前に幅一間ほどの淺い河があつて、河中から溫泉が湧出する。溫泉寺の名は多分此溫泉のことから、自然に發生したる稱呼であらうと思はるゝのである。後醍醐天皇に隨身して、千百の苦艱を嘗め後、朝政の前途に失望して、世を捨て、雲水の人となつた萬里小路藤房が、此寺の開基であると傳られて居るので、住職今城碧山和尙は藤房追懷の碑を建てゝ、其遺跡を顯彰せんとして、精進多年であつたが、その熱心は遂に藤原銀次郎君を動かし、碑が建てらるゝことゝなり、余は和尙の請に應じて



碑文を書くことゝなつた。

右に關係して藤房の事跡を調査するに方りて、所々方々に藤房の遺跡と傳らるゝ寺院の餘りに多くあるのに一驚を喫した。

藤房は建武元年九月二十一日後醍醐天皇に供奉して八幡に參詣したが、數日の後、謁を乞ふて、龍逢比干が君主を諫めて死んだことや、伯夷叔齊が、山林に隱れて餓死した古事などを奏上して十月五日、一人の侍を伴ふて、北山の岩倉に退き、此處にて落飾して、行衞も知れぬ雲水の旅路に上つたのであるが、此後は彼の姿を見たと云ふもの、彼が作りし和歌を見たと云ふものもあるが、眞僞の程は定めかぬるのである。畑と云ふ武將が越前の鷹の巢山でその庵室を發見したれども、遂にその人に接することが出來なかつたとも傳へらるゝが、是等のことも唯だ障子に幻の姿が映ずる程度の、覺束なき談のみである。

藤房が京都の妙心寺に入りて、第二世となつて授翁と稱したと云ふことは、

佛僧の著作に記されて居るので、最も事實らしく傳らるれども、之は最も信じ難きことである。妙心寺は北朝の寺である。藤房は南朝の忠臣である。野武士が衣食に窮して、敵將に降參したるやうな醜事が、高風清節の藤房により て爲されたりとは、痴人の他には信ずるものはあるまじ。此ことを否定するは、水戸の大日本史を待つまでもない。黑川道祐の遠碧軒隨筆によれば妙心寺の第二世は藤房と云ふ名を持つて居たことは事實であるが、それは萬里小路藤房でなくして、吉田中納言藤房であつたとのことである。それは延寶頃の萬里小路淳房が道祐に告げし所であると云ふ。佛僧等は古來その寺院の由來を神祕ならしめんために、あらゆる都合のよいことや人物を併呑して、平然たる惡習がある。藤房妙心寺第二世說の如きも、また此惡手段に他ならざるべし。

第二の藤房に關係ある寺は、河內の觀音寺で、補正儀が此寺を建立して、藤房を請して住せしめたと云ふことが傳られて居る。

第三は下野の下都賀郡西見野村長光寺である。

第四は高野山、北の院で、藤房遁世の後、此寺にて死んだと傳られて居る。

第五は秋田の秋田郡、上旭川村の龜像山補陀落寺であつて、藤房、始は越後蒲原郡持倉村の月泉和尙に從つて道を學んだが、兵亂を避け、泉月和尙と共に秋田に入り、此寺の住職になつたと云ふのである。

第六は近江の妙感寺である。

右の外、筑前にも遺跡があると云はれてゐる。

第七は熱海の溫泉寺である。案ずるに笠置の事、破れて後醍醐天皇が隱岐の島に遷され給ふたとき、藤房は常陸に流されて暫時其處に住居したが、熱海のことは其頃聞知したるべく、後日、世を捨てしとき平日耳聞したる熱海に隱れしこともあり得ることゝ信ぜらるゝのである。

此他に猶ほ調査すれば種々の事跡が更らに出てくるであらうが、畢竟支那の關羽將軍が廣く深く支那人に崇敬せらるゝために各地各所に於て靈を示したと云はるゝと同一のことであるべく、一々其眞僞を追檢するの必要もあるまじく、唯之によりて藤房の高風清節が、日本國民のために追懷せらるゝことの如何に深きかをトすべきである。

## 品川臺場の費用

アメリカのペリーが日本を促がして、開國せしめたことは誰も知つて居るが、其事のあつた嘉永六年は、今より八十六年前であることは、少しく書史に注目するものでなければ、正確に答ふることが出來ぬ位である。今日品川の沖に在る臺場なるものは、右の時勢に處して、外敵の襲來に備ふるために作られしものであることは、また漸やく忘れられんとしつゝある。頃日、少閑に任せて、架上の舊記を繙へすに、品川臺場の記事があるので頗る興味を覺えた。

ペリー來訪は嘉永六年六月であつたが、同八月に至り品川臺場築造の命令

が發せられたが、その名は「大筒臺場」であつた。老中筆頭で、今日の總理大臣に匹敵する阿部伊勢守が、右の御用掛の長で以下御老中、若老寄など數十人の關係官吏が任命せられたが、實際の事務は、御勘定吟味役格、御代官江川太郎左衛門であつたらしい。

一番臺場は二萬六千二百四十七坪で滿潮の時、水面より出ること一丈一尺五寸の豫定であるが、凡べて十一個の臺場を築造する計劃である。

一番臺場の豫算は、一萬二千四百兩、二番は一萬千六百二十兩、三番は一萬千五百九十兩で、受負人は御大工棟梁平内大隅と云ふ者である。

四番臺場は六千六百九十五兩一歩、五番は五千六十七兩、六番は豫算の記事はないが、一番の割合から推算すれば、一坪半兩として六千六百兩當りならん。七番は三千五百七十一兩一歩、八番の豫算不明なるも三千三百兩當りならん。九番は三千八百十八兩二歩、六番、八番も同じく平内大隅に落札した。

五番、七番、九番は岡田治助なるものに落札した。

十番、十一番の豫算は不明であるが、一萬三千兩當りならん。柴又村の年寄五郎右衛門なるものに落札した。

右に要する土砂を取るため、高輪泉岳寺境内の山、松平駿河守の下屋敷、御殿山を掘り崩したのである。

右の臺場築造の全部の豫算の記錄のないのは、遺憾であるが、概算すれば、七萬千六百六十兩内外とならん。

嘉永六年頃は貨幣の純分が低下して、惡質となつたが、假りに一兩の金を四匁として計算すれば、右の七萬千六百六十兩は、二十八萬六千六百四十匁であるから、一匁十五圓とすれば四百萬圓である。此數字は固より正確のものではないが、當時天保以後の貨幣惡化によつて僅かに歳計の辻褄を合せて來た樣な財政で、國防に斯程の力を盡くした當局の苦心は、酌んでやらねばならぬ。

# 英雄と金錢（問答錄）

「現代」の依囑により、一日、三叉竹越與三郎先生を市外沼袋の高臺、閑寂なる邸に訪れて「古今の英雄と金錢」について高教を仰いだ。その時の興味ある問答を錄し、先生の許諾を得て、茲に發表する。

昭和六年十一月　現代　――松本贊吉――

〔記者〕横田千之助氏が、私に云つた事があります。「僕が豐臣秀吉を書けば秀吉が如何に金を集めて散ずる事がうまかつたかといふ見方で書きたい。史家は、英雄を書き、時代を論じても、殆んどその人の財政經濟の手腕に觸れてゐない。私は歷史を讀んで、それを一番遺憾に思ふ。君、英雄豪傑と云はれる人はみな金といふ問題について手腕があつたのだ」横田さんは、自分の體驗からさう云つたのだと思ひます。

そこで今日は、この問題に就いて……

〔先生〕それは横田の云つた通りです。だがそれはひとり、歷史に限らない。我々は若い時小說を讀んでも其の點が氣になつた。例へば、梅暦――德川時代の小說だが、作中に出て來る丹次郎と云ふ男の行動が面白く書かれてあるが、さて、其の丹次郎は、何處から金をつくつてそんな遊蕩をしたのかと云ふ事には、作者は更に觸れてゐない。經濟問題を無視してゐる。だが、經濟を離れて人間の生活はあり得ないのだし、また實は經濟問題こそ、人間生活の大問題で社會人間の萬般の出來事みな經濟問題が原因なのだ。昔の英雄豪傑にしても――小早川隆景の城跡を調べて見ると、彼れの居間の壁紙は、每日の金錢

出納帳の反古で貼られてある。而かもその反古には、自筆で何月何日金三兩誰々に渡す、金五兩――何々を買ふ、といふやうに克明に、細かに其の日〳〵の金錢出納が書付けてある。金錢問題に細心の注意を拂つてゐた事が、これで分ります。英雄は金錢など無視してゐたかといふと實はそれと正反對で、如何にして金をつくり、如何にして金を集めるかと云ふ事は、實によく考へてゐた。

〔記者〕金が無くて困つたと云ふやうな人は誰でせう？

〔先生〕それは、大名豪族の家に生れた英雄を除いては、はじめは皆困つたでせう。明智光秀が土岐家の家來だつた時、大晦日の晩、フト鏡を見てつく〴〵思つた。自分も可成り老けて來たものだ。何時迄碌々としてはゐられない土岐の家來でゐては大した出世の道もない。今、日本國中の大名中、これから偉くならうと思はれのは尾張の信長だ。信長に仕へたら出世の道もあらうと考へて、土岐領を出ようとした。が、名古屋迄行く旅費がない。其處で家財を道具屋に賣拂はうとした。道具屋は一切で一兩の値をつけて小判を出した。すると光秀は、小判を見てゐたが、これは贋金だと云つた。そんな事はない。本當の小判だ。イヤ贋金だ。受取れない。と押問答の末、道具屋は贋金なら自分が持つてゐても仕樣がない、と云つて、その小判を折つて溝に投げ込んで歸つた。光秀はあとで私かに其の小判を拾ひ出して、それを路銀にした。道具は賣らずに金一兩たゞ儲けをしたわけです。

〔記者〕矢張り、貧すれば鈍すですな。

〔先生〕足利幕府にもさう云ふ例がある。これはモラトリアムです。其の頃泉州堺は、貿易の中心地で、金持ちが澤山ゐた。足利氏は、此の連中から金を借りたが、貧乏で返せない。そこで思ひ切つて、モラトリアムを借り手の自分の方から斷行しようとした。が、そこは政治家だから、自分の借金ばかりでな

く、これを全國に及ぼして、今迄の借金は拂はなくともよろしい、といふ觸れを出した。自然自分の借りもその觸れの適用をうけて、堺の商人から借りた莫大の金は返さない事にした。つまり自分の借金を棒引きにする爲めにさう云ふ觸れを出したのです。人民は、無論この觸れを喜んだ。德政だと云つて有難がつた。足利氏はたしかにこの德政――モラトリアムで人氣を得たのです。

〔記者〕フーヴァーのモラトリアムは貸した方から云ひ出したのですが、足利氏のは借りた方から――逆ですな。それで世間の人氣を得たとはさすがに政治家ですな。しかし、さう云ふ政府では信用と云ふものがなかつたでせうな。

〔先生〕それはさう。だから當時の貨幣――この頃から貨幣制度が發達して來たのだが――は堺の商人の信用で出來た。それに堺には、外國貿易の關係上、早くから鑄造の知識があつたので、全國から出た砂金は皆堺に集まつてそこで鑄造して貰つた。時代は少しあとになるが、堺の町人湯淺作兵衛常是――この人は後、秀吉に呼び出されて、御銀吹極並びに御銀改役を命ぜられ、大黑と云ふ苗字を賜つて、大黑銘打印の事を司どつたが、其の頃の小判には皆この人の名の「常是」と云ふ銘があつた。

〔記者〕政府よりも常是の方が信用があつたわけですな。

〔先生〕話は戻るが、秀吉などは毛利征伐の時など、將士に對する褒美にも、皆な小判をくれた。だから其の當時の小判は貨幣であると同時に勳章の役目をつとめた。天下を平定して、伏見、聚樂などに盛大な催し事をやる時にも、集つて來る大名には「金分け」と云つて小判を三十枚、五十枚と贈物した。大名だとて人間だから、小判を贈られてイヤな氣持のする筈がない。だから催し事もよかつたのだが、その他にかう云ふ贈物も又人氣をよくしたらしく思

はれる。

〔記者〕増田長盛、長束正家――かう云ふ人が秀吉の大藏大臣だつたと云ひますね。

〔先生〕さうです。だから、秀吉は非常な驕りを極めたやうに云はれるが、實は金をうまく散じて人心を收攬した。金を生かして使つたのです。が、一方金を集める事も巧みだつた。

〔記者〕所謂太閤檢地をやつて稅金を取り立てたのも其の一つでせう？

〔先生〕さう。久しく亂れてゐた稅制を確立したわけです。同時に金銀の採掘を盛んにやつた。尤も、これは當時の英雄が皆心掛けた事で、謙信は佐渡の金山からドン〳〵砂金をとつてゐたし、信玄も夙に此の事に目を付けて砂金を採集し、ポルトガル式鑄造の方法を採用してゐた。稅制も、甲斐獨特の大切、小切と云ふ稅制をしいて、うまくやつてゐた。勢力のある大名は皆この心掛があつたのです。そこへ行くと佐久間信盛などは、武勇と云ふやうな事ばかりに懸命なので、結局當時の落伍者になつて了つた。

〔記者〕信長はケチだつたと云ひますが。

〔先生〕ケチと云ふ點では家康もケチだつたが、ケチと云ふよりは金の値打ちをよく知つてゐたのだね。或る時、山城の八幡宮が荒廢したので、樋をかけ替へると云ふ時、信長は從來の木造の樋を見て、木造は損だ、鑄物で造つた方が長く持つと云ふので、今までは大工に賴んでゐたのを、鑄物屋に命じて六間の鑄物樋を造らせた。織田家は父の代から富裕だつたのだが、信長は此の家に生れても、かく迄金錢に細かつた。だから、金錢に困つたと云ふやうな事はなかつた。

〔記者〕さう云へば、長篠の合戰に强敵武田に痛擊を加へ得たのも、信長には三千挺の鐵砲があつたからだと云ひます。金があつたから、鐵砲の準備が出

來たのですな。

〔先生〕たしかにさうです。信玄以來の强國甲州勢を破つたのは、一に信長に貯財があつたからで、決してたゞ武勇智略ばかりではなかつたのです。

〔記者〕それから信長は兵を動かす爲めに四通八達の道路を造つて、兵の運用を敏活にしたと云ひますが、これも矢張り、金があつたから出來たのでせう家康は、就中、其の點には群を拔いてゐたのではないでせうか？

〔先生〕家康が秀吉と和睦した時、秀吉は砂金一駄を引出物として家康に贈つた。家康は秀吉の富裕に驚きつゝも、此の引出物を非常に喜んだ。だから大阪落城の時も、先づ何よりも先きに金藏を探して、そこにあつた三百萬兩の小判を分捕つた。そして、江戸に幕府を開くと、諸國の金山を盛んに掘らせた。伊豆の土肥、佐渡、まつたく不思議な程金が澤山出た。だから、德川派の學者などは、秀吉が大阪にゐた時には銀が出たが、家康が江戸に幕府を開くと、金がドンドン出た。これは、天が家康に幸したのだと云つた。而かも諸國の金山の採掘權はみな幕府が握つてゐたのだから、益〻富裕になるばかり、最初天下を取つた時の德川家は百四十萬石位のものだつたが、見る〳〵うちに四百萬石の大身代になつて了つた。つまり德川の統治政策は、大名を貧乏にして置いて、德川家を富裕にすると云ふ方法だつたのだね。

〔記者〕家康は金に困つたやうな事はなかつたのですか？

〔先生〕あります。まだ天下を平定しない時分、ある日、能狂言師の大久保長安に向つて、兵を澤山養ふには金が要るが、その金がなくて困る、と云つた。すると大久保が、イヤその事なら先づ、金を掘り出すに限ります。幸ひ私は甲斐に傳つたポルトガル式の鑄造方法を聞き知つてゐます。と云ふと家康喜んで、早速大久保を金銀奉行にした。その時掘り當てたのが土肥の金山です。さう云ふ譯で、德川家のはじめには驚く程金銀が出て、金一に就いて銀十と云

ふやうな割合、そこでその交換、今で云へば、爲替相場に逸早く目をつけて儲けたのが三井家です。三井家の當時の日記には、毎日の金銀の相場が書いてあります。

然るに、徳川の中世になると、諸國の金銀も餘り出なくなり、加ふるに日光廟の造營、江戸城の修繕、島原の亂、天災地變の救濟と云ふやうな事の爲めに、金銀の消費が多くなり、幕府の財政は段々窮乏をつげて來て、つひに維新の頃にはもう幕府は財政的に倒れてゐた。

鳥羽伏見の戰ひは、既に無力になつてゐる幕府を一押し、押し倒しただけで、こんな事がなくとも幕府は、財政的に倒れなければならない狀態にあつたのです。これに反して、薩長は、大名中でも金を持つてゐた。ことに長州は關ヶ原合戰で、徳川家にいぢめ付けられた時から、何時かは一戰を交へなければならないといふ覺悟で、極度に儉約して、特別に其の爲めの金を貯へ、其の半分を新田の開拓に投じ、殘りの半分を大阪の商人に廻して、利殖の道を講じてゐた。長州が、幕府から征められても屈せず、つひに、薩摩と共に幕府を倒したのも、此の用意があつたから出來たのです。これは少し大勢論になり過ぎたが……

〔記者〕しかし、さう云ふ時代の英雄は、その人自身に財政經濟の手腕があつたのですか、それとも部下にさう云ふ手腕のある人があつたからですか。

〔先生〕それは、部下の中からさう云ふ手腕のある者を見出したのだな。例へば漢の高祖には、有名な蕭何と云ふ大藏大臣がゐたし、秀吉には前に云つた增田、長束、それから家康には本田正信――が、これも其の頭領たる人の着眼がそこにあつたから見出せたのです。佐久間信盛のやうな武勇一徹の豪傑はそれが出來ない。

〔記者〕しかし明治のやうな一つの政府の中で、仕事をするには、さう云ふ腕を要しないでせう。例へば、西鄕、大久保と云ふやうな人も、別に、その方面では。

〔先生〕西郷や大久保は、維新前の活動も、藩と云ふものを控へて、その藩の金で、諸國の浪人を御馳走したり、自分自身も自由に活動したのだから、金錢上の手腕は必要としなかつた。たゞし、これも藩に金があつたから自由に活動が出來たのです。併し、土佐の坂本龍馬などは、その當時でも海援隊と云ふものを組織して、一方海軍の事に當ると同時に貿易もしてゐた。それが後に岩崎彌太郎の九十九商會となり、更に三菱となつたのです。

〔記者〕明治の元勳の中では、誰れが其の方面の手腕があつたでせう？

〔先生〕岩倉公かな――岩倉は、明治三年、西園寺公が洋行する時に、特に西園寺公に云つた。「日本も、四十年後には、天下、人輕くして、金重い時代が來る。今から其の積りでゐ給へ」勿論これは西園寺公を、若いが人物と見てさう云つたのだらう。が、西園寺さんは、その時慾張爺何を云つてる位に思つてゐたと云ふが、今から思ふと、岩倉公は、よく見てゐたのだね。又岩倉公はこんな事も云つてゐる。土地の大名倒れたる上は、金の大名起るべし。政治家は先づ金持になつて逆まに誘惑を防ぐべし……蓋し活眼だね。

〔記者〕大村益次郎は、當時頭が最も科學的だつたと云ひますが……

〔先生〕さう。大村は維新第一等の頭だつたな。その日記を見ても、江戸を攻め、東北を征伐しても、いつも幾日に何處其處落城の豫定と云ふやうに書いてあるが、その結果が、彼の豫定とパツタリ合つてゐる。恐るべき頭でした。此の人も西園寺公に、濱町の土佐の邸が五百兩だと云ふからとつて置け、と勸めた。が、西園寺公は、五百兩あれば柳橋に三日ゐられる、と云ふやうな調子で取合はなかつたさうだ。

〔記者〕柳橋に三日行くのをやめて買つて置くと、西園寺さんも今は大富豪でしたね。

〔先生〕が、結局使つて了つたらうよ。金錢に恬淡な人だから。はつはゝゝ

ゝ。

〔記者〕話は飛びますが、張作霖なども、金錢的手腕は偉いものですな。彼は僅かな紙代と印刷費だけで、何の準備もない奉天票を無暗に發行して、鮮銀金券と引換へては日本で取付けた。この儲けが彼の、武器彈藥となり、鐵道敷設の資金となり、莫大な個人財産になつたのださうですね。

〔先生〕先年、郭松齢が叛旗を飜へして危かつた時があつたでせう。あの時彼は現金を箱に詰めて、日本居留地に預けたのですが、現金ばかりで二千萬圓あつたと云ふのです。其の外、投資してゐる事業がどの位あつたか知れないのだから、その富の程度はおそるべきものだね。

〔記者〕蔣介石があれだけの仕事の出來たのも、つまりは、浙江財閥とうまく結び付いたからですな……金といふやつは何うも……

〔先生〕それは、昔も今も同じ事。漢の高祖が、匈奴に圍まれて危なくなつた時、匈奴に金をやつて圍みを解いて貰つた。鐵刀で敵を破るよりは、金刀で敵を懐柔する方が、早くて效果が多いのですね。

# 桔梗屋覺帳

この頃自分は、大阪の古本屋の市で、桔梗屋覺帳といふ古い帳面を發見した。之で見ると、桔梗屋といふのは、京都でも相當舊い暖簾の店であつたらしい。

その帳面といふのは、享保から安政に至る、約百五十年間に亙る桔梗屋の大福帳のやうなものであつて、毎年の暮に、收支の締くゝりをして、身代の增減工合を記入したものである。

享保といふ年は、新井白石が元祿年間惡貨鑄造の後をうけて、貨幣の金純分を少くし、貨幣價値向上に努めてゐた時代であつた。卽ち、言つてみれば、元祿年間は今日言ふところのインフレーションの時代であり、享保年間はデフレーション時代とも見られよう。

そこで桔梗屋だが、この店が創業されたのは、享保年間であつて、遂に德川幕府の末葉、安政の頃ほいまで、連綿と續いてゐたらしい。然しその後の記錄がないところを見ると、どうやら安政年間の大變革裡に遂に滅亡の非運に見舞はれたものゝ樣だ。

帳面によると、桔梗屋は最初に銀六貫目を資本として店を開いた。そして翌年末には銀八貫目、翌々年末には銀十貫目迄、身代を伸した。その後順調な發達を遂げて、約百五十年を經過した安政の頃には、銀七十貫目の身代に到達した。

德川幕府時代の貨幣價値から推算すると、銀五十貫乃至七十貫目といふのはまづ今日のミリオネヤーに相當する額であつて、桔梗屋もかくて、分限者の中に入つて來たのである。

然し乍ら、順當な發展を遂げた店が、約百五十年の長年月をかゝつて、最初の六貫目からやつと七十貫目の身代に辿りついたといふことは、その間に於ける財產の增殖率が、如何にも遲々たるものであつて、寧ろ其の發展膨脹振りが餘りにも暇取つたものであることを想はせられる。

之によつて考へて見ると、幕府の中世に於て既に我國の資本主義は相當高度迄發達し、競爭者の多數、或は資本利子率の僅少の爲に、桔梗屋といへども、百五十年間かゝつて、やつとこの身代に到達したのである。このことは頗る興味深い事實であつて、自分は他日幕府時代に於ける資本主義發達史を、充分に調べて見たいと思つてゐる。

今日我國富豪の双璧である三井、三菱を以て、恰も我國資本主義發達途上の好機運に一擧に惠まれたものかの如く、考へてゐる者もある。然し以上によつても知らるゝ通り既に我國資本主義の或る段階の發達は相當に舊い。だから三井、三菱の大富豪を生じた陰に幾多の桔梗屋的存在があつたことを忘れてはならない。

言ふまでもなく、資本主義發展過程の幼稚な時代こそ、急激な財產の增加も見られようが、之が一定度に達した時期に於ては、さういふことは困難になる。

かういふ見地から、日本資本主義發達の跡を、コンクリートに研究することは極めて適切緊要なことであらう。桔梗屋覺帳の樣なものも、かういふ眼で眺める時、そこに無限の興趣を見出される。

（昭和十年二月　政治經濟時報）

# 倭寇が作つた上海

わが國民が今最も深き關心を持つ上海は、日本人のために起された都會であるといへば、世人はこれを信ぜぬであらうが、事實において日本人のために起つた都會である。

北條氏の末期から、わが國に倭寇といふ海外侵略運動が起つた。その彼等はその初め、朝鮮を侵掠したが、やがて朝鮮の沿岸を傳つて遼東半島に移り、一轉して中部支那に入り、江蘇、浙江などの最も殷賑な地方に移つた。そして十六世紀の初頭、支那の年號でいへば嘉靖ごろ、日本の天文、永祿年間が最も倭寇の盛んなころで、遂に一隊の侵略軍が、南京までさかのぼるやうになつたので南京城はたゞ城門を閉ぢて自から守るのみであつた。

このころ上海は一の漁師村に過ぎなかつたが、倭寇が主として揚子江、黃浦江附近を目がけて上陸するので、これを拒ぐ城塞が必要であるといふことから、こゝに嘉靖三十二年（西曆千五百五十三年）上海城が築造せられたのである。

同じ時、江蘇、浙江の二州の中に、新たに築城せられた縣城に、新昌縣、嵊縣、慈溪縣、嘉善縣、象山縣、寧海縣、黃巖縣がある。舊城があつたものを、倭寇の來襲に備ふるために、補修擴大したものは、臨海縣を初めとして數城ある。右の如く上海縣城は、倭寇を防禦するために築かれたものであるが、五百年後の今日、わが陸海軍の新戰場となつてゐるのは、何といふ運命の皮肉であらう。

それのみでない。我陸軍の上陸したる寶山路、吳淞鎭を初めとして、今の新戰場は皆五百年前に、倭寇が蹂み躙つた古戰場であることも妙な廻り合せである。支那歷史家の記事によれば、倭寇は先づ揚子江中の崇明島を根據とし

次に寶山に上陸して、これを淵藪として、四方を侵掠したとのことである。寶山はこの時より一百年前明の天子が高さ三十丈、周圍六百丈の烽堠を作り、晝は堠上に狼火を起して、夜は火を焚き、燈臺としたのであつたが、その寶山が却つて倭寇のために逆用せられた。そして倭寇は、青肅の法昌寺に據り、さらに浙江まで侵出したのである。

「月落ち烏啼いて霜天に滿つ」の詩で有名な楓橋も、また倭寇の舊蹟で、嘉靖三十四年に倭寇は、無錫から太湖に入り、許墅に入りさらに楓橋を犯したとのことである。その他、平望鎭、黎理鎭、白柳港、福山港、梅李鎭、嘉定縣城、黃姚港、南翔、婁頭鎭、劉河、年山、朱涇、拓村鎭、亭林鎭、張堰鎭、乍浦、沙岡鎭、下沙浦、周浦鎭、烏泥涇鎭、南滙等、およそ要害の地、殷富の鄉、皆倭寇の侵略を蒙らぬ土地はなかつた。

さらに常熟附近においては、孟瀆、淖港を犯したが、一轉して浙江省に入り、王江涇、杉青堰、驛亭埭、桐鄉、皂林鎭、平湖縣、雅山、茶磨山、湯山、衢山、呂港、鮑郎市、龜山、長溝、關、餘姚城、夏蓋山、梁湖鎭、清風嶺、紹興、臨山、稠嶺、高橋、丈亭、激、奉化山、招寶山、伏龍山、補陀洛山、天同嶴、大浹江、中大河、螺峯寨、蒙頂山、大佛頭山、東溪嶺、八排門港、竿門港、遊仙寨、芙蓉山、防海塘等の要地、一として倭寇の故戰場でないものはない。

その頃、支那の江蘇や浙江などの酒樓で、左の如き日本の歌を謠ふものがあり、そして後には、それが浙江文士の間にも波及して、支那の詩に翻譯せらるゝやうになつた。

十五夜の月は宵々くもれ、曉さえよ、殿御もどそよ。
いとしの殿や、おいとしの殿や、とまれ弓楯に箭筒に藏かうに。
十七八と寐て離るゝは、只だ浮草の水ばなれよの。

是は堺の坊主の隆達と云ふものが歌ひ出したものであつて、今日の都々一や、ヨシコノ節は、此隆達節から變生したものだと云はれて居る。如何なる經緯で、此隆達節が江蘇、浙江まで傳はるやうになつたかと云へば、倭寇が至る所

に此歌を傳へたからである。

倭寇とはいかなるものであるか。北條氏の末期ごろから起つた海外侵略運動である。その初めは中國邊の海嶋を領有する小土豪の事業であつたが、後には九州、中國、四國一般に傳播して、一種の流行となつた。當時の船舶は七八十人しか乘りえぬ。今日の語でいへば、七、八十噸くらゐの小船であつたが、初めはこの小船の二、三艘くらゐで出動したものが、中ごろでは十艘二十艘となり、後には連艦數百艘、海を掩うて渡るといふ聯合艦隊となつて、嘉靖四十一年、卽ち日本では上杉謙信と武田信玄が信州の川中嶋で雌雄の決戰を試みた年には、倭寇は福建省の興化を攻めて、その城を略取するに至つた。謙信や信玄が信州や越後で尺寸の土地を爭つてゐるとき、無名の英雄は幾千人、呑天浴日の大波濤を蹴つて、海外に飛躍してをつたのである。

倭寇とは支那人がこの侵略軍に附けた名であるが、彼等は自から海賊軍と稱してをつた。十四世紀ごろ歐洲ではブリヴァチールと稱する私立海軍があつたが、倭寇はこの種類のものであつて、人目を忍ぶ海賊でなく、四國、九州、中國の地方政權が公然と出動したものである。そして海上で戰ふことを、俗に海賊と稱するので、この海外侵略軍は自から海賊と稱することを恥ぢず、朝鮮や支那の地方政權と交渉するとき、自から海賊大將軍梶原何某などと稱するものが少くなかつた。これは海賊とは海軍といふ意義に解せられた證據である。

嘉靖三十五年倭寇が、浙江省の桐鄉といふ舊都の城を攻めたときその勢ひ强盛にして支那軍は到底これに敵し得ぬと見たので、總督胡宗憲は、倭寇の魁首に二人の美人と、千兩の黃金と、絹織物數十匹を贈り、ひそかに祕密協定を作つた。そして巡撫阮鶚が總督の命を受け、兵を率ゐて倭寇に立向ふや、倭寇は約の如く戰ひを交へずして敗走してしまつた。そこで總督は附近の農村か

ら、無辜の支那良民二百五十人を收縛し、その首を斬りて倭寇を斬獲したと稱して朝廷に報じた。そして桐鄉の縣誌には、撫臣阮鶚、力戰して倭寇を却くと記してゐる。

倭寇は右の如く實際の戰爭によつて財物を得、或は贈遺によつて金銀を得たが、それは彼等の力戰の結果のみではなく、支那の海賊が嚮道をするためであるから、利益の幾分は彼等に分配したものである。此の如きもの數十年、ある地方を占據して數年を暮らすので、蘇州、杭州では彼等とともに日本商品が輸入せられ、そして彼等が酒に乘じて歌ふところの隆達節を眞似て歌ふ者さへ現るゝに至つたほどである。倭寇は土地の略取が目的でなく、金錢の利を獵するのが目的であつたから、遂に大陸に足場を作らずして終つたのである。しかしながら倭寇が南方から迫つたので明朝はその防禦のために奔命に疲勞したとき、滿洲朝廷から北から攻略を初め、南北多事のために明朝が亡びたのであるから、倭寇が支那の歷史に働いた部分は、頗る廣大なものであつた。

（昭和十二年十月　サンデー毎日）

# 鷓鴣の聲

二三年此の方、余が家の芝生に見なれぬ小鳥が折々に來るのを見受ける。鳩よりも小さくツグミやヒヨドリよりも大きく、それが梢に昇りて啼くときはビイーツビ、ビイーツビと云ふやうな聲を發するのである。附近の農民に聞いてもその名を知るものがない。

兩三日前、交詢社で此話をしたところが、小山完吾君が言下にそれは鷓鴣に相違ないと種々に說明するので、始めてそれと云ふことが分明した。

鷓鴣は所謂る「越鳥南枝に巢くう」などと云ふ越鳥で、昔の越の國卽ち今の廣東地方のものであり、或は「鷓鴣啼き老ゆ日南の花」なぞと云ふやうに



安南などは其の發生地であるのに、如何にして東京近郊などに飛翔するやうになつたか。小山君の說によれば十數年前東京の愛禽家が南支那から之を取寄せて、鎌倉戸塚地方の林叢に放つたことが、年々繁殖して遂に東京の郊外まで進出するやうになつたものであると云ふ。

鷓鴣は南國詩人の好題目であつて、之を除いては南國の竹枝は歌はれぬほどである。唐の李涉は「越岡連越井、越鳥更南飛、何處鴣鷓啼、夕烟東嶺歸」と歌ひ、羅鄴は「好倚青山與碧鷄、刺桐毛竹待双栖、花時遷客傷別離、莫向相思樹上啼」と歌ひ、また劉王孟の詩には「冥々花絮隔遙山、脈々風煙暗百蠻、曾向黃陵竹裏啼、羽毛尤帶淚痕班」と云ふのがあつて、鄉愁や離恨には必らず引合に出るやうになつてゐる。

支那人は此鳥の啼聲を形容して鈎輈格磔、若くは泥滑々と云つて居るが如何に發音せらるゝか知らぬが、支那人の耳には杜鵑の聲のやうに消魂の趣が

あつて離愁を催ほすものらしい。

昔し天津橋上に杜鵑の聲を聞いたものは、北人之より天下の變を來さんと豫言したさうであるが、南國の鳥の聲が東京郊外に聞えるやうになつたことを知らば、何と云ふであらうか。

（昭和十三年七月　野火）

# 福澤先生の誕生日に際して

## 先生の日本歴史に於ける地位

今日、福澤先生の誕生記念日に、何か私に三十分程お話を申上げるやうにといふ命を受けました。其時、私よりも色々先輩もあるだらうから、且つ私は福澤先生に親炙すること短いので如何かと思ひましたが、考へて見るとさう古老も澤山なく、私などは殘つた枯葉の數葉の一つである。然らばまあ私が出ることも必ずしも出過ぎでもないと思つてこゝへ出たわけで、唯取り止めもなく二つ三つのことを申上げたいと思ひます。

福澤先生の日本歴史に於ける地位は、獨立自尊といふ四字で盡きて居ると

思ひます。平安朝、源平、德川と續いて、數百年の間に日本人は稍〻其日を送つて居るだけで、天より與へられたるインディヴィジュアリティーといふものを發揮する機會がなく、又それを認識する人が少なかつた。福澤先生に至つて初めて、政治の下では人民として存在し、社會にあつては一個人として存在する、非常に深い根柢のある、意味のあるものであるといふことを敎へられて、恰も眠れる者の眼を醒したといふやうなことをせられた。是が日本の近世史を作る思想上の大勢力であつた。

併しながら、ヨーロッパに於ても、固定した社會に或る革命を起した人は澤山ありますが、大抵の人は、ルソーにせよ、モンテスキューにせよ、革命を起す理論を敎へて、其社會を破壞した儘で終つて居る。建設は後の人がやつたのである。福澤先生は從來の思想を叩き壞してしまつて、舊說守るに足らず、舊信仰信ずるに足らずといふことを敎へて、社會を攪亂して革命を起したが、其革命せられたる社會を、更に新しく建設する方へ向けて行かれた。最初はフリーシンカーであつて、從來のものは悉く壞はされた。而して地方分權論、民權論、藩閥打倒といふやうなことをやりながら、之を段々と國權論へ導いて、國人相爭ふことを止めて對外精神を起さなければならぬといふ方へ向けて、明治の中世までは、福澤先生の指導で日本が動いて居つた。是はヨーロッパの大革命家のことなどに較べて非常に變つたことである。多くの革命家は革命してしまつたら、自分は隅へ引つ込んでしまつて居る。先生は革命の後、之を建設へ向けて行かれた。是はヨーロッパの歷史には餘程珍しいことである。

## 理解せられ難い思想家

併しながら、福澤先生の事業は思想的であるから、中々世間に諒解せられることが少く、七・八年前、福澤諭吉といふ芝居が出來て歌舞伎でやつたことがあ

る。或る劇作家が見物の一人となつて見て居ると、年齢七十位のお婆さんと四十位の奥さんと二人見て居つて、其お婆さんの方が「今舞臺に出て居る福澤といふ人は一體何をした人かね」と言つたら、若い四十位の奥さんが「何か西洋のものを飜譯した方ださうですよ」と言つて居つた。それを劇作家が見て居つて、此思想家を劇にすることは如何にも困難であるか、是が若し英雄豪傑で華々しい戰爭でもした人だつたら極くドラマチカルに書けるが、思想的の事業をした人を書き現はすといふことは如何に困難なものであるか、といふことを、私に話したことがある。お婆さんや中年の奥さんが福澤先生を「何か飜譯した方ださうですね」といふが如き、日本の思想の歴史を知らぬ人は、福澤といふ人は金錢を大切にすることを唱へた拜金主義者だとか、さうでないと分つて居つてもわざ〳〵嫌がらす爲にかゝる說を傳ふる人もありますが、福澤先生の事業は非常に深く、非常に弘ろく、かゝる片言隻句で毀ち得るものでない。英雄豪傑は山へ火を付けて燒くといふやうなことをやります。中々立派に見えます。然るに思想上の革命、生活上の革命を起す人は、恰も長い雨が降つて、其雨が木の根に入り、木の根から谷川に傳はり、谷川から段々山へ水が滲みて、或る時期が來ると段々山が崩れる。さういふやうなことをするのか思想上の革命で、福澤先生は丁度長雨が積つて山が崩れるやうなことを爲さつた方であります。福澤先生の生涯の經歴は石河幹明君の書かれた福澤諭吉傳にありますから、之を御覽下さい。是は正確にして疑ふべからず福澤先生の事實上の傳記は之に盡きて居ります。

## 西鄕隆盛の人間味

是等のことを思ふと、私は西鄕隆盛のことを考へます。西鄕隆盛は今では上野に銅像となつて居る位で、偉い傑出した豪傑に違ひない。併し西鄕隆盛

は今では殆んど神様みたいに奉られてしまつた。西郷隆盛の地金に鬚を生やしたり、白粉を塗つたり、もう地金はなくなつて、あとはくつ付けたもので塗り上られて居る。西郷隆盛は世間で言ふ豪傑であるばかりでなく、非常な人生の經驗に富んだ人であります。文久元年といふと維新の革命に先立つこと五年前であります。三井に行つて、是から世の中は中々變つて來るから、大名と雖も町人の息子を養子に貰ふやうにしなければならぬ、どうぞ三井の子供を一人薩摩へくれぬかといふことを言つた。即ち薩摩の武力と三井の黄金の力とを合せてやらうと思つて言つた。此位にキャピタリズムの力を認めて居つた。三井の方は吊鐘に提燈と言つて斷つた。其指名された人は先々代で餘程繪を描く人であつたさうでありますが、西郷は其位に人事に通じて居つた。其他その言行を仔細に見ると、如何にも人間味があり、面白味がある人であるが、此頃の西郷傳は全く胡粉で塗つて、金銀を張りピカ〳〵して愛國心が袴を着たやうに出來て居る。

## 先生の國權論に反駁す

福澤先生に至つては門下生がインテリであるからそんなことはしない。ありの儘、福澤傳に書いて居る。今後百年經つても白粉を塗つたり、金銀を張つたりする人は此門下生からは出ないと思ふ。福澤先生を熱心に崇拜しても、嘘や作り事をして傳へる人がないと思ふから、此點に於ては安心である。私は福澤先生が自由獨立を唱へられて、更に慶應義塾を實業の方へ導いて行かうと志された明治十四年に慶應へ入つて來た。其頃福澤先生は國權論を書いて居られた。藩閥は宜くない藩閥は倒さなければならぬので自分は骨折つたが、今後は内に相争ふ時でない。衆智を集めて國權を確立して外に向ふべき時であるといふことを唱へられた。それを擴められて原稿が二十枚

位出來ると、塾生を呼んで疊に坐らして、それを愉快らしく讀んで聽かして居られた。吾々は聽かされた者でありまして、所が私はどうも頗る意に滿たない。藩閥はどうしても倒してしまはなければならぬ、それを先生は藩閥を倒すことは止めて國權を擴張するといふことはどうも宜くないといふので先生に長い手紙を上げたら一寸來いといふので行つた。所が君の手紙を見たら文章も宜い理窟も宜いが、まだ分らない、もう少し經つと能く分るからといふて手輕るくあしらはれてしまつたが、今考へて見ると、福澤先生は早くから國權擴張に向つて居られたのであつた。

## 先生の朝鮮政略

此國權の擴張は、先づ第一に朝鮮を日本のものにしなければならぬといふことで、是は議論でなく實行に移られた。福澤先生の門下から朝鮮に行つて働く人が段々出て來たのは、此國權論の結論であります。明治二十九年であつたが、朝鮮の李王がロシヤの公使館に逃げ込んだことがあります。今日になつて見れば、ロシヤの皇帝が朝鮮を保護國とするといふことを決めて朝鮮の方から願つて、之を聽き屆けるといふことで、李王がロシヤの公使館に逃げ込んだのである。所が日本は何とかして之を引出したいと思ふが、明治二十七八年の戰爭の結果、國力が弱つて居る。引出すには日本の武力を以てやるよりない。武力を以てやればロシヤとの戰爭になる。それで頗る弱つて居つた。其時福澤先生が時事新報へ――其頃時事新報は今の交詢社の近邊にあつた――そこへ私に、朝鮮の亡命者を七八人呼んで來いと言はれたので、連れて來ました。所が先生が朝鮮人に言はれるに、日本は今支那と戰つた後で疲れて居る、ロシヤと武力を以て戰ふことは出來ないから、イギリスを引つ張り出して、イギリスの力を借りて、さうして朝鮮をロシヤと爭ふの他はない。

それには亡命者達、君等が働け、先づイギリスの公使館へ駈け込み、日本頗る頼むに足らぬから、國を擧げてイギリス政府の命令を奉ずるから、どうか朝鮮をイギリスの保護國にしてくれといふことを頼め、イギリスは必ず慾を出して出て來るに違ひない。慾を出して出て來ればイギリスとロシヤの爭ひになつて、結局日本はイギリスを使つてロシヤを叩き潰すことが出來る、其積りでやれと言つた。さうすると亡命者達が、畏りましたといふので、早速イギリスの公使館に駈け込んだ。さうすると數日經つて、西園寺公が外務大臣の代理をして居りましたが、私を呼びに來られて「どうも三田派は何か此頃妙なことを企てゝ居らぬか」「いや、何もない」「そんなことはあるまい。本當のことを言つて貰ひたい。實はイギリスの公使から外務省へ斯ういふ報告がある。朝鮮人が駈け込んで來て、朝鮮をイギリスの保護國にしてくれと言つて來た。どうも朝鮮人の細工にしては少し良過ぎる。是はきつと三田派の畫策に違ひないと思ふから本當のことを言つてくれ」「實はさうです」「さうか、それは非常に邪魔になるから、それは止してくれ。必ず日本政府は決心して有ゆる手段を以て失つた權力を回復する。そこへイギリスが入つて來ては邪魔になる。イギリスは今の所慾はない。どうか政府に任してくれ。福澤先生に其ことは止めてくれと勸告してくれ」といふことでありましたから、私は其ことを福澤先生に報告した。先生の國權論は、朝鮮をロシヤに取られたら日本の心臟に向けてピストルを向けられたと同じになるから、どうしても朝鮮を日本のものにしなければならぬといふ趣意であつた。

## 金玉均の横死と朴泳孝

それから金玉均が上海で李鴻章の手先に暗殺されたことがある。其報告を聽くや否や、福澤先生は直ぐ私に、森村組に行つてくれ、どうしても朴泳孝を

使つて金玉均の代りに働かさなければならぬ。だから森村組のアメリカの支店から、取り次いで朴泳孝を歸すやうに色々方法を講じて貰ひたいといふことで、私は早速森村組に行つて（こゝに森村市左衞門さんが居られますが）其ことを申しました所が、それは宜しい、併し電報料五十何圓掛る、私の所は商事會社で、是は只上げるといふ譯にいかぬから貸金にする、借用證文を書いてくれと云ふのである。それから私は福澤諭吉代理、金五十何圓といふ借用證書を書いた。さういふ譯で福澤先生は、金玉均が死ねば朴泳孝を呼んで來るといふやうに、朝鮮といふことは朝から晩まで頭に浮んで居る。自由獨立といふ大宣言をやつて人民を教育したが、更に一歩轉じて日本の國權を擴張する。それは唯議論するばかりでなく、今申上げるやうに、朝鮮をどうしても抱き込んでしまはなければならぬといふのが先生の考である。數年經つて森村男爵から私の所に、貴方の借用證文がありますがと言つて來たので、お返ししますと言つた所が、男爵はあれは家の大切な書付であるから保存すると笑はれた。

## 初め壞して後に建設

斯ういふ譯で、福澤先生は思想上に革命を起してパーソナル・インデペンデンスといふことを教へ、天賦の良智良能を發揮して己れ自ら働くことを考へさせた。其結果薩長と政黨の爭を起した。已にして是は止めさせなければならぬ。之を纏めて國權擴張に向はなければならぬといふことを說かれた。初めは破壞、後には建設。是は明治の時代に關しては永久に傳へられなければならぬ事實であります。

さういふやうなことで色々申上げれば申上げることもありますが、時間も迫つて來ましたから此位にしますが、福澤先生の特異なる一つは、思想上の革

命を起し、社會上の變革を來し、新社會を拵へ、さうして外に向つて日本の國權を擴張するやうに向けようといふのが、先生の定つた方針である。思想家としてばかりでなく、學者としてばかりでなく、國民の主領として立派な仕事を殘されたのである。吾々はさういふことを考へると、如何に先生が國家の前途を達觀し、而して之を導くの力を持つて居られたか、深く敬服に堪へない所であります。

（昭和十四年一月十日　三田評論）

# 元老・西園寺陶庵公を語る

# 元老・西園寺陶庵公を語る

昭和十五年二月　實業之日本

## 高人・西園寺公

〔記者〕陶庵公を語るに三叉先生を以てすることは、團十郎に「勸進帳」を演じて貰ふやうな極付で、生じつか、われ〳〵が質問し、註文するといふことは餘計なことにもならうかと思ひますから、先生の觀られた陶庵公――人間としてみたもの、政治家、元老としてみたもの、文人雅人としてみたもの、さういつたことについて、順次いろ〳〵お話し願ひたいと思ひます。

〔竹越〕私が西園寺公を知つたのは明治二十九年であつた。當時私は、陸奥宗光伯の門下生で、役人ではないが始終從つてをつた。ところが、陸奥伯は肺

病で始終寢てをつて、「自分はもう永いことはあるまいから、君を西園寺に紹介するが、これによつて、君は滿足するだらう。西園寺は自分の觀るところでは、天下第一の高人である。この位の人は見たことがない」と言つて、私のことを西園寺公に賴んで與れて、その時初めてお會ひした。

爾來、四十何年公に從遊してゐますが、陸奥伯の許した高人といふ言葉は、どこまでも眞實であつた。公が政治家としてどういふことをしたといふのは既に諸君も御承知のことと思ひますが、その心持は高人といふ評に盡きて居ると思ふ。

西園寺公は國家といふことを非常に心配してをり、同時に皇室といふことを大切に思つてゐる。さうしてこの皇室の御安泰と、國民の幸福といふことを結びつけて、これで政治をやるのほかないといふ心持で、總てのことをやつて居る。然るに公は、未だ嘗て自分は皇室の忠臣だなどといふことを一言も言つたことはない。自分は愛國者だなどといふことを一言も言つたことはない。しかしその心持は、さうして公の政治は、恰も老船長が地圖を見て進路を考へ、さうして舵を定めるやうに――而もその老船長が、額に青筋を立てないで、しづかに、煙草をくはへながら船を進めて行くといふやうなやり方でやつて來たのが、公の政治のやり方であると信じます。

## 三條實萬傳と西園寺公

〔竹越〕明治四十何年か時は覺えないが公が政友會の總裁になつた。それから半年ほど經つてから、明治天皇の御召しによつて參內したところが、三條實萬が京都の公卿の中で、倒幕の率先者であつたから、公の傳記を繪卷物にして置きたい。その傳記を書くには西園寺が一番よろしい。といふのは、三條西園寺、德大寺は一家である。殊に維新のことに早く關係した西園寺が、その

傳記を書くことが最も適當であるから、之をかくやうにといふ仰せを受けたことがある。公は歸つて來て、私にそのことを話し、誰に書かしたらいゝかといふので、私も一緒になつて考へた結果、福地源一郎がよからうといふことになつた。ところがよく考へて見ると、福地は東京市會に關係して、そこでちよつと變な事件があつて問題になつてゐる人に書かして御手許に差上げるといふことは畏多いといふので、考へ直し、結局西園寺公の發案で尾崎紅葉がよからうといふことになつた。公はこれを宮內省あたりの役人に書かして、自分の名前にしてもいゝのだが、それでは極まつたもので一向面白くない。これを尾崎が承知して呉れゝばいゝ……といふので、私もそれはよからうと賛成して、すぐ尾崎に來て貰つてその話をしたら、非常に感激して「やります」といふことになつたので、翌日宮內省から行李いつぱいの材料を取寄せ、それを尾崎に渡して、書くについての心得を話した。ところが半年經つても出來ない。どうしたのかと思つて聽いて見たら、胃癌になつて、とても書けないといふ。半年空しく費してしまつたので、西園寺公が私に向つて、「あなたが書いたらよからう」「ではさうしませう」といふので、私が書いて西園寺公が訂正し、お互ひに討論辯難して第一卷だけは出來た。それをこの位の大きな字で(手眞似して)西園寺公は自分で書きました。さうしてそれに宮內省のことだから、金粉をばら〳〵撒いて繪卷物にしました。

その第一卷にかういふことが書いてあります。三條實萬の生れた頃の日本は、西洋各國が非常な變化を受けたことも知らない醉生夢死の狀態で、西洋ではナポレオンが出て、所謂土の中から大將を作るといふやうなやり方で、人材が下層から出て、社會は非常な變化を來してゐる。そしてその變化の勢ひで、東洋へ押して來た。然るに日本はそれを知らないで、醉生夢死の狀態にあつた。その間に三條實萬が生れたのだといふことが第一卷に書いてある。

それを陛下に献上した。さうすると、西園寺公が歸られてから陛下が德大寺侍從長に對し「西園寺やつたな」と仰せられたさうです。「西園寺は必ず、この世界の大勢から說いて來るだらうと思つたら、果してその通り書いてあつた」と、非常にその御想像が當つたので喜んでをられたといふことであります。西園寺公が如何なる思想を持つてゐるかといふことを、御承知の陛下は、きつとそこから書いて來るだらうと御想像になつてをられた。君臣相諒解してゐること斯の如きものである。

## 夙成の人・西園寺公

〔記者〕さういふやうに、政治家としても、元老としても高人であつた園公は一面、更に雅人として、文人としても高人であつたといふことが、園公の一つの特色かと思ひますが、その點について……

〔竹越〕陸奥伯の評した高人といふのは文雅であるとか、風雅であるといふ意味でなく、己を捨てゝ皇室、國家のために働くといふ心の高いことを言つたのだ。そして公は夙成の人卽ち所謂ませた人である。

公は十九歳の年、伏見・鳥羽の大砲の音を後ろに聞いて、薩摩の兵一小隊、長州の兵一小隊を率ゐて丹波路に向つて出た。その目的は西鄕や大久保はこの戰ひは或は負けるかも知れない。昔から王室と武將と戰ふ時は、たいてい比叡山に立籠る。それで下を圍まれて糧道を絕たれて負けてしまふ。今度は負けても比叡山には立籠らないで、丹波路を開いてをつて、京都で負けたら丹波路へ出て、そこから長州・薩摩へ行かう。さういふ方針で、それには若い確かりとした公卿を遣はして道を開かしむるがよいと云ふことになり、十九歳の西園寺公が、薩長の兵二小隊を率ゐて行つた。たつた二小隊ですから危ないものです。

斯く我馬の人となつたので公の學問は終つてしまつた。十九歳で既に讀書は終つたので、後は二・三年經つてから、フランスへ行つて、日本の學問、支那の學問を離れてしまつた。併しながら、もう既に支那の儒教の或る問題について疑ひを懷いて、いろ〳〵有名な學者が、やつと今日になつて氣の付くやうな問題を出してゐる。

それから四・五十年經つてからの後の事であるが、私に天台四教義集註といふ本を示して、「これは私が若い時に佛教のことを知らうと思つて讀んだ本だが、その文章は簡潔明快で、この本によつて自分は文章を書くことを覺えたから、これを讀んで見給へ」と言はれた。だから十九歳にして西園寺公といふものは出來てしまつて、その後の數十年といふものは、それが膨脹するだけであつた。所謂夙成の人です。

それから、話は前に戻るが、伏見・鳥羽の戰爭で、徳川慶喜が三萬の大兵を率ゐて、大阪から京都に攻め上り、薩長はこれを防ぐといふ時、朝廷は頗る動搖した兎に角徳川三百年の積威があり諸藩のうち薩長は朝廷についてゐるが、その他の向背は分らぬ。さうして相當の武器を持つてゐる。薩長が幾ら強くても、勝敗は分らぬといふので、公卿は大分動搖したのである。公卿ばかりでなく、安藝藩の長老辻將曹ですら、この戰ひの結末は見透しがつかぬから、彼等が若し戰つたならば、それは徳川と薩長の私闘だといふことで片附けるがよいと云ひ出した。つまり薩長が朝廷のために戰ふのに、こつちは之に對して責任はないといふので、なすりつけてしまはうと云ふのである。西園寺公は十八歳であつたが、それは以ての外だ、これを薩長と徳川の私闘としたのでは、天下の大事去つてしまふといふので非常に激論した。さうすると岩倉公が、思はず「小僧、出かした」と言つたといふ。尤も岩倉公より西園寺公の方が家柄がいゝので「西園寺さん、よく言つた」と附け加へた。此の一言で朝議は

勢附けられたが、その時は多くの人は、若い公卿が非常な強いことを言つたといふ位に思つてゐたが、實は今日の西園寺公が、もう既にその時に出來上つてゐたのだ。之も夙成を示す一例である。

右の如く公は薩長の兵二小隊を率ゐて行つたが、その時に井上馨が西園寺公に向つて「薩摩と長州は、平生仲が惡いから、出先でどう食ひ合ふかも知れない。悍馬を二匹引つぱつて行くことは非常なことですから、どうぞ氣をつけて戴き度い」と言つた位です。さうして二小隊の兵を率ゐて、谷を渡り、川を渉つて、丹波路へ出た。その時は前にもう人を放つて、錦の旗を立てた官軍が行くといふことはずつと宣傳してある。それで馬路といふ村に、今の中川小十郎君の一族がをりまして、六・七十人の者が竹槍、古い鐵砲、錆びた刀など持つて迎へに來た。その他に人見といふ一族を合せて、百五十人程の兵隊が出來た後年公の秘書をしてゐる中川小十郎君はその中川家の正統の子孫です。

## フランス思想と西園寺公

〔記者〕十九歳にして完成された西園寺公が、のちにパリー滯在中、フランス思想に相當影響される所があつたやうに傳へる人もあるのですが、事實はどうでせうか。

〔竹越〕それは其の頃アコラスといふ學者があつたが、これはガンベッタなどよりはもつと學者であつた。ガンベッタは政治家で偉い人ではあるが、理論はアコラスに敵はない。そのアコラスに就て學んだから、人民の自由、國民のゾリタリテイー、さういふやうなことを深く會得してゐる。だからフランス思想といふものの、獨りフランスばかりでなく當時歐洲を風靡した友愛・平等・自由といふやうな思想を受け入れたのである。

そして歸朝匆々、東洋自由新聞なるものゝ社長となつてしまつた。その當

時の自由思想・自由黨などといふものは、今日の人々が社會黨を見るやうに異端逆賊視せられてゐた。そこへ公卿の西園寺公が自由派の親玉にならうといふのであるから、明治政府は驚いてしまつた。太政大臣三條實美、右大臣岩倉具視の二人が西園寺公に對して「華族にして新聞に關係することは以ての外だから、止めなさい」といつたら、西園寺は笑つて相手にしない。「あなた方そんなことを言つたつて、西洋ではどうです。王室に關係のある貴族は政黨にも關係し、新聞にも關係してゐる。これは皆な國家を統一して善く導かうといふ目的から出てゐるのだ。私が新聞に關係することが何で惡い。あなた方は時世に遲れてをつて相手にならない」と言つたといふ。結局勅命が降つて止めろといふことになつたので、勅命だから仕方なしに止めた。

〔記者〕ところで、若い頃からの園公の心友といふか、政友といふか、とにかく手を携へて一緒に動いて來たといふ人はどんな人ですか。

〔竹越〕松田正久、後に原と一緒に政友會を率ゐた人、それから中江篤介（兆民）光妙寺三郎などでせう。そこで勅命によつてそれを止めなければならぬことになり、燃ゆるが如き熱心を以て、沿襲の羈絆を脱して新國民を作るといふ熱誠を漏らす途がなくなつてしまつた。そしてぶらからしてゐる間に、新橋あたりでいろ〳〵の逸事を殘した。

## 政界への再出發

〔竹越〕その後、西園寺公は參事院議官補――今日でいへば内務省書記官くらゐのところで、再び官途についた。

公は維新の時は右近衛中將であり、山陰道鎮撫總督、それから越後筋の總督として相當手柄があつたのだから、その儘をれば立派な官職にも有りついた筈であるが、西洋へ行つてゐる十何年の間に、社會は一變して從來のことは全

く帳消しとなり、つまらない奴がずつと偉くなつてゐる。そこへ參事院議官補で出たのだから、公としては双六の振り直しです。こゝが公の偉いところでせう。今までの參與職や右近衛中將などといふものは消えてしまつて、新に一個の西洋歸りの男子として出て來たといふことは、公の歴史として、注目しなければならぬところである。

丁度それと同じことは、陸奥宗光伯についても言へるのぢやないかと思ふ。明治十年、西郷の亂に際し、陸奥伯が義勇兵を募らうとした。どうも政府の兵隊だけでは心もとないから、義勇兵を紀州から募つて西郷と戰ふと云ふ名義で兵を集め、そして一轉してその兵を以て京都でクーデターを行つて、自分が政權を取つて西郷は俺の力で征伐するといふことを企てたしかしその企ては中途挫折し、捕まつて牢へ入れられた。

陸奥伯といふ人は明治の初年、伊藤公とどつちが人材かと言はれた位の人で、たゞ伊藤公は長州藩といふ背景を持つてゐる。陸奥伯には紀州といふものがあるけれども、紀州は自分の藩でない。天下に奔走する時は土佐の阪本龍馬を力としてやつてゐた。だから、土佐藩といふものがその背後にあつたと言へるかも知れないが、紀州はものにならない。片つ方伊藤公の方には長州といふものがついてゐる。片つ方は藩がない。隨つて陸奥伯といふものは政黨に足場を持たない大臣みたいなもので、甚だ心細い立場にあつた。そこで彼が薩長の出鼻を叩き潰すのはこの時だとクーデターをやらんと企てたが、捕まつて東北地方の獄に入れられた。後赦されて――明治十六年で外務省の御用掛といふので出て來た。今までのことはすつかり御破算で、また新しく振出しに戻つたわけです。さうして終に明治政府の中心になつた。これと西園寺公の行き方と非常に似通つてゐる。今までのことは一切張消し、何の役にも立たない。それから新しく出直したのは二人の偉い所です。

## 政治家としての西園公

〔竹越〕そのうちに明治十八年、伊藤公が憲法取調べといふことで十何人引連れて西洋へ行くことになつた。その時は西園寺公も隨員として一緒に行つた。それは議官補でやつてゐる間に、伊藤公が「この公卿さん、相當にやるなアと見込んでしまつた。そこで伊藤公は主として憲法の政治關係を調べる西園寺公は宮中關係を調べる……。

明治何年だつたか、オーストリーの公使になつて出た。その間も西洋へ行つたり來たりした。此の頃まア本當に西園寺公の値打を知つてをつた者といへば伊藤公か陸奥伯くらゐのもので、その外の方面では、ハイカラな公卿さんだくらゐに思つてゐた人が多い。だから政治上の勢力にはまだならなかつた。そこで、歸つて來てから賞勳局の總裁を勤め、二十八年かに文部大臣になり、陸奥伯が病氣で寢てゐる間は外務大臣代理兼任をやつてをつた。その兼任をやつてゐる間に、段々これはえらい人だなアといふことが分つて來た外務大臣代理から外務大臣、それから伊藤公が總理大臣で怪我した時などは總理大臣の兼任をした。その兼任中に面白いことがあつた。明治三十一年伊藤内閣が財政に行詰つて辭めたことがある――辭めようとして閣員一同辭表を出した。ところが、渡邊國武といふのがをつて言ふことを肯かん。その兄貴は宮内大臣をしてをりました。どうしても自分は大藏大臣として辭表を出さぬといふ。伊藤公はその處分に困つた。自分は總理大臣として閣僚の辭表を纏めて陛下に差出してゐる。然るに渡邊だけは辭表を出さないそれが、西園寺公が臨時總理になるや、陛下に申上げてぴしやつと免職にしてしまつた。それから、次の内閣を西園寺にやれといふ議もあつたが、自分にはまだその用意がない、と言つて斷つた。それで伊藤公のあと誰か總理大臣に

なつた。その内また西園寺にやれといふ話があつたけれども、まだその時機でないといふので斬つた。つまり二度斷つた。その内ポーツマス條約といふものがあつて日比谷で火をつけたり電車を燒いたりした騷ぎがあつた。その時西園寺公はどういふ考へであつたかといふと、ポーツマス條約は國力の疲弊してゐるこの際、これより外に仕様がない。是は贊成した方がいゝと言ひ出した。その時公は政友會の總裁でありました。さうすると、皆んなが、

「そんなことを言つては大變です。われわれはこの波に乘つて行かなければならない」

「いやそれはいけない」

丁度西園寺公の秘書みたいな事をしてゐる横井時雄といふ東京日日の主筆、それにいひつけて、「この條約は今日に於て已むを得ないものと認める」といふことを西園寺公の話として新聞に出させた。

さうすると、政友會が非常な騷ぎになつて何とも拾收がつかない。そこで西園寺公が「國家の爲に政友會の二つや三つ叩き潰しても已むを得ない」と言つた。「自分は政黨の首領である。しかし國家の爲に政黨の首領をしてゐるのである。國家の爲ならば政黨の二つや三つ潰したつていゝぢやないか」――と言ふ。これで皆んな恐れ入つた。非常に溫厚篤實な人だとばかり思つてゐた連中が、この一言にすつかり驚いてしまつた。その後のことは御承知の通りであります。

## 元老としての園公

〔記者〕次に、元老としての園公についてお話しを願へませんか。

〔竹越〕元老といふのは總理大臣で局に當る人以外に陛下の御相談相手となる人を指す。その意味で丁度、西園寺公が元老になつた時は、山縣と松方と

西園寺公の三人が元老だつた。それまでの元老といふものはどうも物事に私心を挿んで、自分の味方を引入れるといふやうな非難が非常に多かつた。ところが西園寺公が元老になつて以來、山縣も聊か憚かるところがあり、松方はまことに好々爺で殆んど嘴を挾まぬ。だから元老が三人になつた時は事實上西園寺公がリードしてをつた形です。その頃から「元老といふものもさう惡くないものだ」といふことになり、後年西園寺公一人になつてからは「元老といふものは相當いゝものだ」といふ位に思はれた時代もある。この數年は民間で氣に入らぬ人が總理大臣になつたりすると、これは元老の推薦が惡いといふやうなことに――この頃言ひ出して來たけれども、先づ公平無私、眞に國家の爲に憂ふるものであるといふことにはなつてゐる。

それについて、丁度第一次西園寺内閣の時、松田正久を捉まへて「君司法大臣になれ」と言つた。ところが松田が「私はお斷する、政友會としては杉田定一が古參でもあり、政治運動の爲にすつかり財産を蕩盡してやつてゐる。これを一つ私の代りに採つて呉れ」さうすると西園寺公が毅然として「僕は内閣を組織するに方り政友會の論功行賞はしない。國家の爲に適材と思ふ者にやつて貰ふのだ。杉田には又別に酬ゆる途がある。自分は國家の爲に内閣を組織するので、政友會の論功行賞ではないのだから……」と言つたので、松田も合點して「御精神はよく分りました」といふので引受けた。さういふところは洵に理義が正しい。

〔記者〕ところで、園公の陶庵といふ雅號は陶淵明か何かに私淑された意味ですか、それとも他に謂はれがあるのですか。

〔竹越〕そんな難かしい意味はない。要するに瀬戸物は固いけれども脆い何かにぶつかると破れてしまふ。園公もあゝいふ性質で強いけれども脆い瀬戸物みたいだといふのでせう。

## 園公の日常生活

〔記者〕園公も本年九十二歳、これから、尙ほ百年の齡を保たれるでせうが、日常生活の方面にも何か心を配つてをられる點があるのではないでせうか、さういつた點で何かお話はございませんか。

〔竹越〕別に養生といつてはない。かういふことをすればいゝと言はれても、格別なことはしやしない。病氣になつたら醫者の言ふことを守ればいゝと云ふのである。明治三十年だつたか、パリーで盲腸炎を病んで、それがいろいろ軀の惡くなる因でした。

實をいふと、私は私生活はあまり知らない。さういふ方面は中川君や原田秘書がよく知つてゐるでせう。しかし、食慾は平生强い人です。

それから民間療法といふやうなものに何等の興味を持たない人で、いつか齋藤實が朝鮮總督をしてゐる時、人參を送つて呉れた。さうすると「竹越が人參好きだから、あつちへ送つてやれ、俺はかういふものは信じない」といふくらゐで……まア二例に過ぎないけれども、時々「かういふ非科學的なものは相手になりませんな」といふ。てんで相手にしないのです。

要するに概論すれば、園公は如何にフランスの思想を受けても、新世紀のいろ〳〵なものを受容れても、結局公は朝廷の純臣である。昔から君に仕へるに三つの途があるといはれる。一つはいはゆる英雄的の人は權力を好み、さうして自分の權力を擴張して行く。その結果は動もすれば威力が君主に迫るといふやうな人がないとも限らない。これを權臣といふ。第二の種類の人は必ずしも奸惡ではない、下等ではないが、君主のお氣に入らう、お氣に入らうと努める結果、君主を諫めるとか、國家の爲に斯うでなければならぬと思ひながら、それを抂げて君主の意見に迎合する種類の人、これは決して奸物といい

ふのではないが、いはゆる寵臣です。

その次のタイプは君主に媚びず、君主の御機嫌を取らず、國家君主の爲にこれがいゝと思ふことに邁進して、時には君を諫め、時にはお氣に入らぬことも申上げる。そして專ら皇室國家の爲に盡さうと心懸ける、これが純臣――この三つあるが、西園寺公の意圖するところは先づ純臣である。而して概していへば公は純臣としてその志を成したものです。天下もまア園公の志を諒としてゐるでせう。それは無論いろ〳〵缺點もあり、仕損ひもあるが……本來公は行政官としては得意ぢやない。たゞ大局を見て大計を立て、之を行ふに方り、其の心事が高尚で自己といふものを顧みないところが公の取柄であらうと思ふ。

〔記者〕園公百年の後の元老はどうなりませうか。園公の後に園公なしかどうか。

〔竹越〕なくては日本は困る、けれども澤山なからう。

〔記者〕園公と近衞公とは、何か特別な御關係があるのですか。

〔竹越〕先代の霞山公篤麿、あの人はどつちかといふと薩長に對する不平家でしたよ。霞山公を學習院の總裁か何かに推薦したのも西園寺公です。どうもあゝ不平家を集め、浪人を集めてゐては爲にならぬから、一つ學習院あたりに据ゑて本當の事を段々分らした方がいゝといふので推薦したわけですさういふ風に、若い有能な人を引立てたいといふのが西園寺公の考へで……今の近衞公なども、若くして才能のある人ですから、それで相當眼をつけてをつた。とにかく園公は勢力を張るとか野心を持つとかいふことが一切ないと近衞公に安心してをつたといふのも、近衞公が西園寺公を利用するやうなことがないと見てゐるからだ。さういふ點は非常に公平至純です。

〔記者〕いやどうもいろ〳〵有難う御座いました。

# 日本の自畫像

# 日本の自畫像

## 日本に就ての誤解

人は往々にして稱揚せられて却てクスグツタき思を爲し、攻擊せられ、排斥せられたとき、始めて自から誇榮を感ずることがある。國際上に於ける日本の位置はそれである。

嘉永六年（千八百五十三年）アメリカの使節ペリーが、日本に來りて戸を叩き、日本が本意ならずも、列國に向つて國を開きし以來、四・五十年にして日本の形勢は全く一變して、近世國家となつた。歐洲各國が封建時代の舊衣を脫して近世國家となるには、長きは三百年、短きも二百餘年を要したるに比して、日本が

此の短かき歳月の間に、異常巨大の變革を遂げたことは、甚しく歐米の學者・政治家を驚愕せしめた。そして、此の驚異は多くの批評を生み出した。その批評は日本に同情するものと、之を嫌惡するものとの兩樣であることは自然の勢であるが、日本に同情するものにせよ、日本に反對するものにせよ、日本を正しく領解せざることは同一である。日本人は是等兩樣の批評を見て、數十年間苦笑を重ねて來た。

今より十數年前、本野子爵が大使としてフランスに駐在した時である。或る日、進化學者で、群衆心理說の唱道者であるギュースタープ・ルボンと會談したとき、彼は一の疑問を本野子に提出した。彼の說によれば日本が東洋の偏隅から起つて、短日月の間に世界の大國となつたようなことは、世界歷史に於て、未だ曾て聞見せざるところである。それは恰かも彗星の燦然耀然たる光彩は、地上の人を驚かすが、やがてそれは地平線の彼方に沒し去らねばならぬ運命を持つてゐると同じく日本は短日月の間に躍然として偉大なる勢力を示しても、それはやがて消え去らねばならぬ運命を持つてゐるのではあるまいか。蓋し日本の如く五十年の間に、偉大なる勢力を張ることは進化の法則に於て許るさゞるところであるといふのである。本野氏は之に答へて、日本は四・五十年にして大國民となつたのではない。二千五百年間歩一歩と踏み固めて、今日の文明を築造したのであるといつた。ルボンは更らに、君は二千五百年の歷史と言ふ。余は二・三の日本歷史を讀んだが、それは封建大名の戰爭と宮中の陰謀の歷史に他ならぬ。若し日本自からその文明史を有するといふならば、君自から之を著述しては如何と勸告したことがある。本野子はフランスから本國に歸り余にこの事を語り、歐洲に於ては識者ですら日本を解し得ざる此の如くである。かゝる疑問を解くべく、日本歷史を著述しては如何と、余に勸告したのであつた。余が此の疑問に答ふべく著作したのは日

本經濟史であつた。

世間、國際の形勢に注目する識者であつても、日本に對して正當なる解釋を爲し得ぬこと、ルボンの如き人は少なくはない。總ての誤解の本は、日本がペリーに迫られて開國する以前は、東洋の隱者國であつたとなし、隱者國は文明もなく、藝術もなく、哲學もなくその歷史は世界歷史と全然懸け離れたる特異の歷史であり、その國民は封建大名の心のまゝに、進退座作したものであると信ずるからである。かゝる國民が四、五十年の間に、躍然として世界の中心に進出するのは不思議であるといふ。その結果として、或るものは之を疑つて日本の近代化は皮膚一枚の假粧のみとなし、一枚の皮をむけば、依然たる封建日本であるとする。或るものはその發達は不自然であり、模倣であるが故にやがて挫折する時が來るであらうといふ。或るものは一種の妖怪的存在であるとなし、やがてそれが支那といふ黃龍に乘つて、世界を襲擊し、ジンギスカンのことを行ふであらうと言ふ。或るものは日本人を以て古代ギリシヤ人の如く、武勇を尊んで詩歌的生活を送る國民であるといふ。何れにしても多くの誤解の本は日本を知らぬからである。そしてまた日本人の中にも、古典や神話を勝手に綴り合せて、一種の夢幻的の日本を畫き出し、之を眞日本なりと爲し世界の他の國に對する日本の特異性を高調し、此の夢幻の日本に合せざる近世思想、近代生活を一切外來物なりとして排斥する狂信家あるが爲めに、日本に對する外國の誤解は益す深まる。

## 日本史は世界史の一部分

日本はペリーに戸を叩かれて國を開く前に於てすら、決して全く世界と異なる發達をして來たものではなかつた。二千餘年の前から、歐洲人の考ふるが如くに思考し、歐洲人が苦悶せるが如くに苦悶し、歐洲人が樂しんだ如くに

樂しんで來た。日本人の歴史は歐洲の歴史と全然懸け離れたものでなく、日本歴史は世界史の一部分である。日本が世界の强國となつたのは、四・五十年間の事業ではなく、歐洲に於ける最も古き歴史ある國民と、同一の過程を經歴しての結果である。

歐洲の何れの國民の歴史を見ても最初は奴隷を主要なる材料とする經濟組織を有するのが、共通の現象であつて、之を名づけて奴隷經濟時代といふ。歐洲の奴隷經濟時代はローマのスパルタカス戰爭時代などを中心として、その前後に盛衰はあつたが、英國の如きは第十三世紀頃のノルマン・コンケスト時代から段々奴隷が減少し、久しからずして奴隷經濟時代は去つて、土地經濟時代となつた。日本も亦之と同じく歴史の初頭から奴隷經濟であつた。大寶令時代(西暦八世紀の初頭)に公布せられたる法令に於て、公民を分ちて三級となし、初級の民は財産三十貫文以上を所有せざる可らず、第三級の民は財産一貫文以上を所有せざる可らずと規定したが、其の財産は必しも通貨に限らず、米若くは奴隷を以て之に換算することが出來た。而して奴隷一人の賣買價額は、六百文内外であつたから、奴隷一人半を有する者は、公民として存在することが出來たのである。唯だ、日本の奴隷制度の運用は歐洲のそれよりは寛仁であつて、奴隷が老年に及んで勞働に堪へざるとき、若くは特別の藝能を有するとき、若くは主人がその才を憐んで、特に之を愛するときは、之を放つて自由の民とすることが多いので、漸次にその數が減少し、奈良朝の中頃に於ては、奴隷の數は全人口の一割半位であつたらしい。之は奈良の正倉院に保存せられたる戸籍殘編を基礎としての推測である。イギリスは之より後るゝこと四百年ほどの十二・三世紀のノルマン・コンケスト時代に於ては、奴隷の數は人口の一割に減少したといふことは、イギリスの歴史家の言ふところであるが、その事情はイギリスと日本と略ぼ同樣である。

歐洲に於て奴隷經濟時代の次に來つたものは、土地經濟時代であるが、日本も亦同一の現象を來たした。奴隷經濟時代に於ては、人口が少なく土地は餘りあつて、そして耕作勞力が乏しいので、總ての人が望む所は、此の勞力を得んとすることであつた。その必要から奴隷が生れ、賣買せられ、掠奪せられた。然るに此の數百年の間に於て人口が自然に增加して、至る所の土地が耕作せられた。そこで已に耕作せられたる「土地」に、支配權を及ぼして、之から收入を取ることが豪族の間の通有の希望となつた。此の希望から歐洲に於ては、マノールランドの發生となつたが日本に於ては、マノールランドと同じ性質の莊園(即ち別莊地の意)といふものが起つた。此の時代は多くの土地を取り、それからの收入を計ることを主としたので、之を土地經濟時代といふのである。そしてその發生の方法に於ても、發生の時期に於ても、繼續時間に於ても、日本の莊園と、歐洲のマノールランドとの間に共通する所がある。

土地經濟から如何にして貨幣經濟時代に移つたか。歐洲のマノールランドに於ても、日本の莊園に於ても、そこに一種の中心が出來て商業が起り、工藝が生れた。此の商工業に伴ふて貨幣の必要が起り、一切の人事は、貨幣により て清算せらるゝ事になつて、茲に貨幣經濟時代が起つたが、貨幣經濟時代の產物として、諸種の經濟的機構が生れて來た。その中最も注目すべきものはギルドであるが、歐洲に於てギルドの發生の本原は神に仕ふる人々の間から起つたものであり、後來それが產業政治等にも擴張せられ、十二世紀頃から純然たる經濟上の機構となつたものである。然るに日本に於てもまたギルドが同じく神に仕ふる人々の間から起つたのである。最も明白に記錄せられたものでは、源平時代に於て京都に近き山崎神社の神官が、神に捧ぐる燈火に用ゆる胡麻の油につきて專賣の權利を要求した。そして此の油が京都より八九十里を隔てたる播磨の地方に生產せられ、此處から海と山とを航して、山崎

神社に送らるゝので、此の河と海に於ける關稅をも免除せらるゝことゝなつた。そして神官の家族が增加して、京都に移つて市民となつた後も、京都に於ける胡麻の油の專賣權は、是等の神官の家族の身に伴ふて發生した。日本では之を名づけて座といふのである。酒の釀造に用ふる糀の專賣權も、同じく小野宮の神官によりて要求せられ、同じ方法によりて、京都に移住したる神官の身に伴ふて、京都に於て糀の座が發生した。そして此の座はその他の各種の產業に就ても發生し、足利時代から德川時代(西曆十三世紀から十五世紀)まで日本に於ける總ての經濟機構の中心となつた。そして各地の自治體の中心は、座であつたことは、歐洲の自治體の中心がギルドであつたと同一である。そして日本に於ける座は、大名の武權と、長き抗爭を續けて、或る時は敗北したが、あるときは勝つた。地質學者は我々に語つて世界各國を地質學より見れば、その地層は東西南北を通じて同一である。唯だ地殼の變動のために、各國の地層の間に不整合の所なきにあらざるも、大體に於ては共通であると言ふ。人類進步の歷史にもまた地層があり、その地層は、世界列國共通であることは以上の如くである。

日本が歐洲に就て斷片的な智識を有するやうになつたのは、足利時代の季世(十三世紀)に於てポルトガル人や、スペイン人や、オランダ等の商人から道聽途說的に、その近事を聞き込みたるに始まるが、眞實の意味に於ける日本と歐洲との交通は、安政五年(千八百五十八年)歐米と通商條約を締結した事である。かゝる狀態の下に於て、如何にして二千餘年以前から、日本と歐洲とが同一の歷史的地層をするのであるか。春になれば至る所に花がさく。夏になれば穀物と果實が實のる。冬になれば草木がその葉を地上に落し、樹液を根本に蓄へて明春の計をする。それは東西南北を通じて同一であるが如く、人類が本能と智識の命ずるところに從つて動くことは、アジヤ人も、歐洲人も、同じこ

とであるからである。故に日本人の歴史は、即ち歐洲人の歴史である。畢竟各國の歴史は世界史の一部に他ならぬ。日本を知らんとするものは、先づ此の事を念頭に置かねばならぬ。

## 外國を正解する日本人

自己に同じきものを愛し、自己に異なるものを疎んずるのは動物の本能である。人類が他の動物より優秀にして且進歩する所以は、その同と異を形態に求めずして、その心に求むる一點である。その心に於て共通する所を求むれば同情・親善・理解茲に生じて四海一家となるのである。皮膚の色彩や、言語の構造や、文字の形體や、衣服家居の樣式などに拘泥して、互に相疎隔するは道路にある人々の爲す所である。日本が嘉永・安政の際、米國及び歐洲各國と通商和親を開始せんとするや、同を愛して異を疎んずるの心から、一切の外國人を野蠻人と號し、野蠻人と交通するのは國民の恥辱で、且つ危險であるといふ說が盛に稱道せられた。道路の人は之に尾鰭をつけて種々の風說を散布し開國すべきか鎖國すべきかの議論が、至る所に闘はされた。當時京都の朝廷に於ても、此の事については數ば討論せられたが、當時三十年間、政柄を握つて居つた闘白鷹司政通は鎖國論を排し開國論を唱道した。彼の說によれば、我國已に支那と交通しオランダと通商する事三百餘年である。今アメリカ、フランス、ドイツ、イギリスと交通するも寸毫も變化あるわけではない。唯二個の外國を六個とするのみである。宜しく速かに交通を開始すべしといふのであつた。然るに茲に鎖國論を煽揚し、その勢に乘じて、開國政策の責任者たる德川將軍の幕府を倒し、政權を朝廷に回復すべしとの計畫が生れて來たので、朝廷の貴族は殆んど之に同意し、鎖國論は數年の間全國を支配したが、德川將軍の幕府が倒れた後は、數日にして鎖國論が閉息して、開國政策が決定的國

論となつたのみでなく、堤防を決して海水を引き入るゝが如く、歐洲文明を採取するに至つた。日本國民が言語・風貌・家居・衣服によりて歐米人を異類として排斥せんとしたのは、僅か數年間の事であつて、その後は同類として、親睦し同情し、諒解し、好愛するに至つた。

今日に於ては日本人ほど外國を知り、その長を取り、美を取るに熱心なる國民は、全世界の何れにも見出すことは出來ぬ。日本には外國語を語るに巧妙な人は少ない。然しながらイギリス人よりも、より能く英國の歴史を解し、フランス人よりも、よりよくフランス文學を解する人は少なくない。日本に於ては、中央放送局から毎朝三十分間、放送によつて英語かドイツ語を教授する高等學校以上の學校に於ては、英語を第一外國語とし、その他の外國語の中、必ず一種は學習せねばならぬ。中學校に於ては國文學の外に英語を教授する故に文部省年報によりて、過去三・四十年の間の學校教育の結果を積算すれば英語を知るものは、已に五百萬人以上に達してゐる。日本本土の人口は六千四・五百萬人であるから、外國語を知るものは、約八・九分に達する勘定である。自國語以外に外國語を學習すること、此の如くに熱心なる國民は、果して世界の何處に求むることが出來るであらうか。そしてそれはイギリス人が大陸に旅行するがために、フランス語を學び、若くはフランス人がイギリスに旅行せんがためにイギリス語を學ぶといふような簡單・卑近・手近の日用語の修得のためではなく、その書籍・雜誌によりて、外國文明を吸收せんとするためである。

日本人が外國の文明に對する欲求が、以上の如く熱切であるのを見て、日本個有の文明の貧弱なるがために、渴するものが水を求むるが如くに、外國の文明を追求するものであると信ずるものあらば、それは速了の見である。日本人は歐洲の何れの國民よりも、早く已に種々の政治上や、經濟上や、社會上の經

驗を積み、學問を生じ、歐洲と交通する以前に已に渾然たる一種の文明を醸生してゐた。日本は大化時代（六百五十年頃）に於て、農業には木鍬と、鐵鍬とを併用したが、七百年頃から、專ら鐵鍬を使用し、大寶時代（西曆七百一年）の文武天皇は右大臣阿部の御主人に紬五百匹、絹糸四百、絹布五百端、鍬一萬口を賜與したことがある。當時偏隅の地にあるものは、猶ほ未だ木鍬と鐵鍬とを併用したが、都市に近き大農は、專ら鐵鍬を使用したのである。そして平安朝時代に於ては木鍬は最早や見ることが出來なくなつた。然るに英國に於ては、第十世紀の頃迄、木鍬を使用したのである。日本國民は大寶時代（第七世紀の初頭に於て）には兩面の窠綾（スカシのあるアヤ）薔薇綾等の高尚なる織物を製造した。貴族の屋上は燒き瓦で蓋はれた。同時に於て、今日用ゆるが如き金色の漆が已に製出せられた。砂金が已に商品となつて市場に出された。丈六の金銅佛を作るほどに、冶金の技工を有して居つた。日本は奈良朝に於て已に精密なる戸籍法を全國に施行したが、その殘編は今尚ほ奈良の正倉院に保存せられてある。當時日本の如き戸籍法は支那を除き、世界の何處にもなかつたのである。その支那さへも、皇帝の居住する都會以外には實行せられなかつたものである。

歐羅巴文明史の高峰と一として數へらるゝジヤスチニアンの法典はその公布せらるゝまで多くの歳月を要したが、その發布せられたるは西紀五百二十九年である。然るに日本に於ては大寶時代（西紀七百一年）に於てジヤスチニアンにも劣らぬ大寶令なる法典が公布せられた。それは政府の組織から社會の組織を規定し、各法に亙る完全なる根本法典であつて、爾來一千二百年の間、時勢の變遷に會ふて、その或る部分は停止せられ變革せられたが、行政上の根本主義としては、明治十八年（千八百八十五年）伊藤公によつて內閣制度の確立せられた迄勢力を持つたものである。此の法典及び之に先だつ四、五十年の